

特別支援教育のあり方

～現状と課題、今後の方向性について～

令和4年6月9日
教育委員会事務局



1. 障害のある子供の学ぶ場について

特別支援学校

視覚障害 知的障害 病弱・身体虚弱 聴覚障害 肢体不自由

	H23	R3	比率
神戸市	804人	1,158人	1.4倍

小学校・中学校

・特別支援学級

視覚障害 知的障害 病弱・身体虚弱 聴覚障害 肢体不自由 自閉症・情緒障害

	H23	R3	比率
神戸市	1,263人	2,265人	1.8倍

・通常の学級

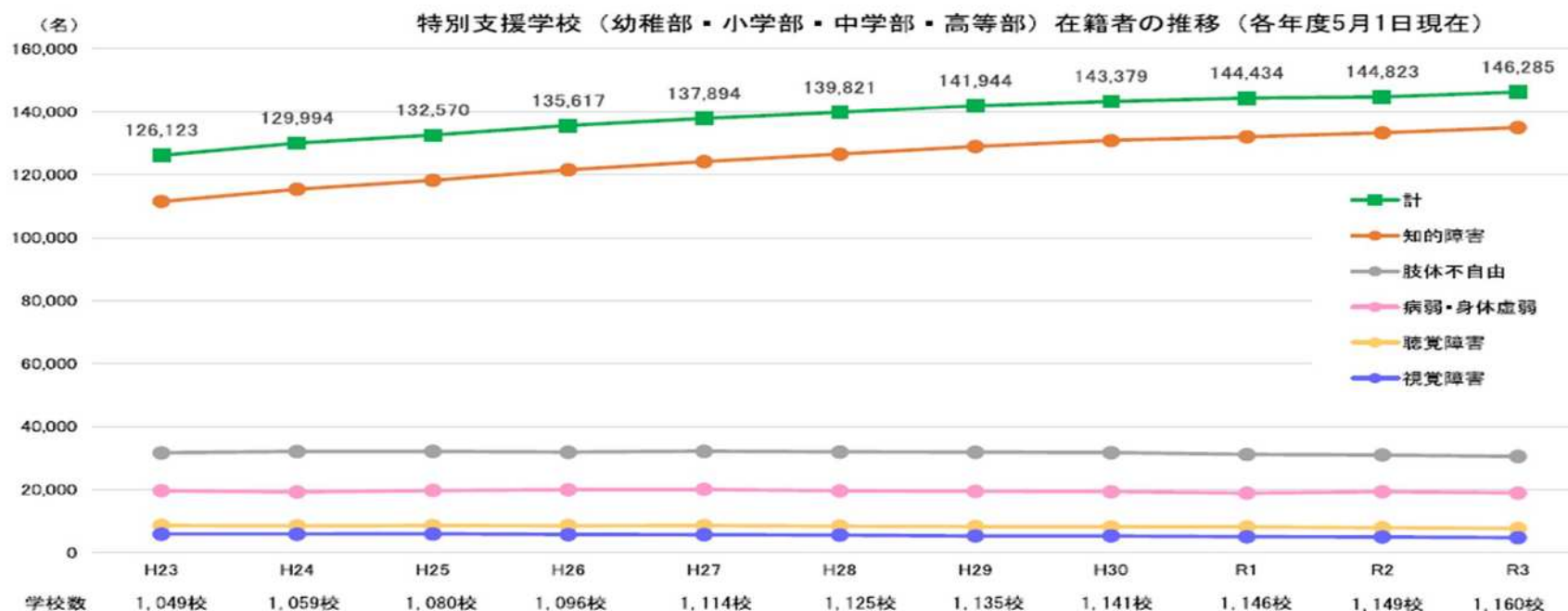
通級による指導

視覚障害 聴覚障害 肢体不自由 病弱・身体虚弱 言語障害 自閉症・情緒障害
学習障害（LD） 注意欠陥多動性障害（ADHD）

	H26	R3	比率
神戸市	435人	839人	1.9倍



特別支援学校の幼児児童生徒数・学校数の推移



【令和3年度の状況】

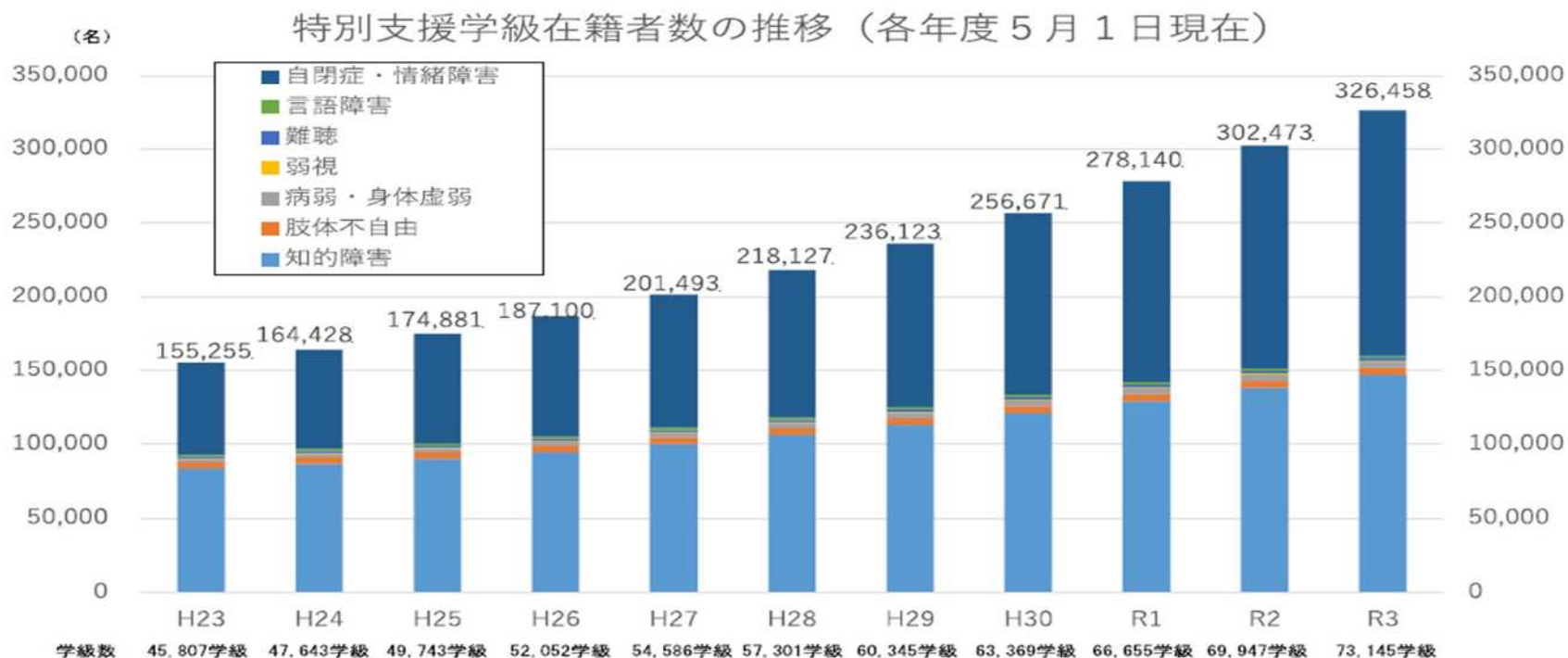
	視覚障害	聴覚障害	知的障害	肢体不自由	病弱・身体虚弱	計
学校数	84	119	801	354	154	1,512
在籍者数	4,775	7,651	134,962	30,456	18,896	196,281
学級数	2,054	2,759	32,095	12,114	7,518	56,540

（出典）学校基本調査

※平成19年度より、複数の障害種に対応できる特別支援学校制度へ転換したため、複数の障害に対応する学校及び複数の障害を有する者については、それぞれの障害種に集計している。このため、学校数及び在籍者数のグラフと表の数値は一致しない。



特別支援学級の児童生徒数・学級数



【令和3年度の状況】

	知的障害	肢体不自由	病弱・身体虚弱	弱視	難聴	言語障害	自閉症・情緒障害	計
学級数	31,227	3,191	2,883	544	1,341	692	33,267	73,145
在籍者数	146,948	4,653	4,618	631	1,931	1,355	166,322	326,458

（出典）学校基本調査



通級による指導を受けている児童生徒数の推移

通級による指導を受けている児童生徒数の推移(各年度5月1日現在)



(出典)通級による指導実施状況調査(文部科学省初等中等教育局特別支援教育課調べ)

※平成30年度から、国立・私立学校を含めて調査。

※高等学校における通級による指導は平成30年度開始であることから、高等学校については平成30年度から計上。

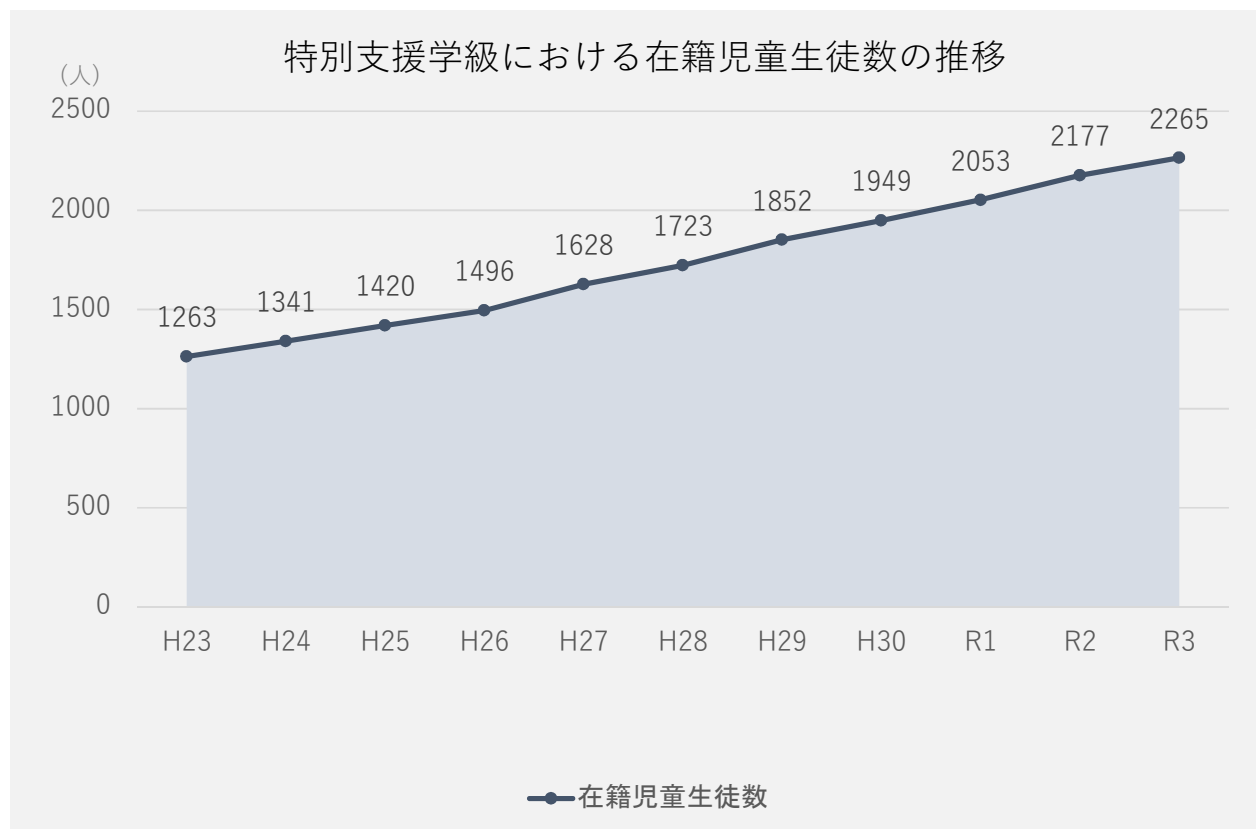
市立特別支援学校における在籍児童生徒数の推移

- 市立特別支援学校の在籍児童生徒数は増加の一途を辿ってきたが、近年は、ほぼ横ばい傾向。
- インクルーシブ教育の浸透が進み、地域の小中学校へ児童生徒が流れている傾向にある。



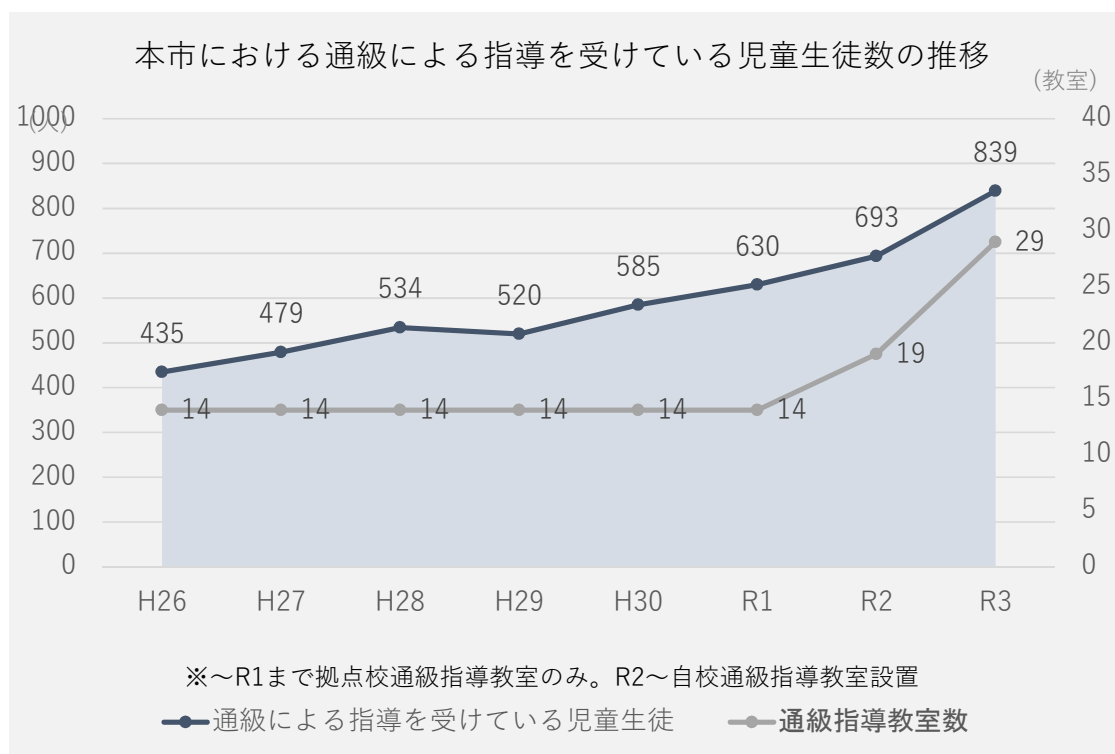
市立小中学校（特別支援学級）における在籍児童生徒数の推移

- 特別支援学級に在籍する児童生徒は増加傾向にある（10年で約1.8倍）



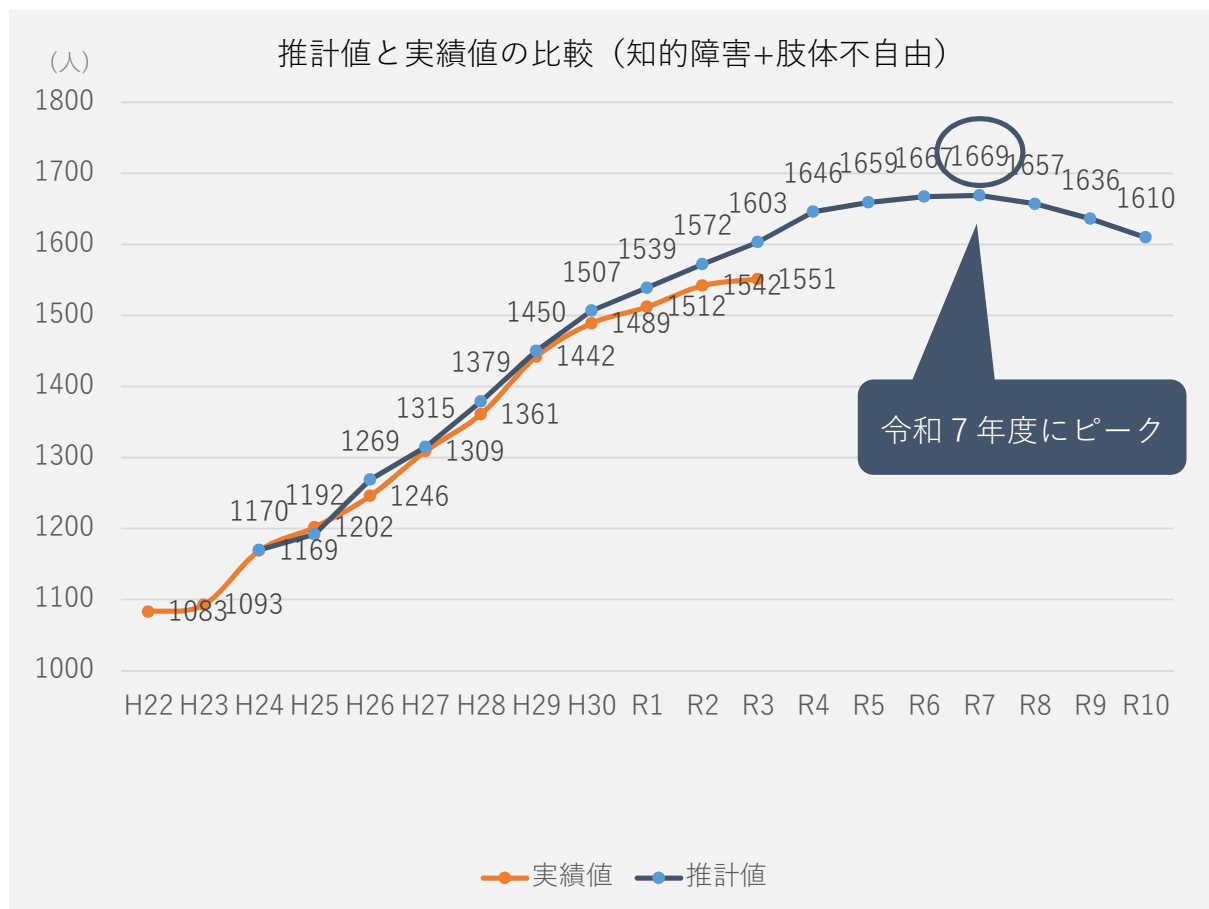
本市における小中学校（通級による指導）の現状について

- 通級による指導を受けている児童生徒数は増加傾向にある。
- 本市においては、拠点校通級指導教室14教室に加え、令和2年度より自校通級指導教室の整備を進めている。
(令和8年度までに約100校 整備予定)



特別支援学校の児童生徒数の将来推計について

- 将来推計によると、特別支援学校の児童生徒数（市内在住）は、令和7年度にピークを迎える。



本市における特別支援学校整備状況



青陽須磨支援学校
(神戸市須磨区)
平成21年4月開校
知的障害/肢体不自由

友生支援学校
(神戸市兵庫区)
平成25年4月開校
知的障害/肢体不自由



1 2

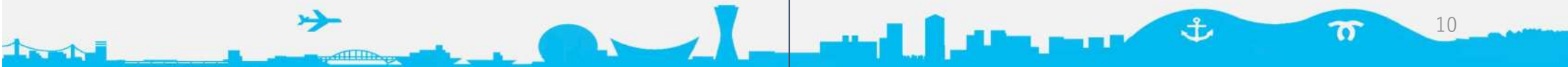


いぶき明生支援学校
(神戸市西区)
平成29年4月開校
知的障害/肢体不自由

灘さくら支援学校
(神戸市灘区)
令和3年4月開校
知的障害/肢体不自由



3 4



神戸市内の児童生徒が通学する特別支援学校

県立のじぎく特別支援学校(S33)
 西区(神出・押部谷・桜が丘中学校区)
 (知/小・中・高) (肢/幼・小・中・高)

いぶき明生支援学校(H29)
 垂水区(歌敷山・星陵台・多聞東・本多聞・神陵台中学校区)
 西区(神出・押部谷・桜が丘中学校区を除く)
 (知/小・中・高) (肢/幼・小・中・高)

県立神戸特別支援学校(S53)
 北区(知・肢/小・中・高)

青陽灘高等支援学校(R3)
 東灘区(本庄・魚崎・本山南中学校区を除く)・灘区・中央区
 (知/高)

友生支援学校(H25)
 (知) 兵庫区・長田区
 (肢) 兵庫区・長田区
 (知/小・中・高) (肢/幼・小・中・高)

県立芦屋特別支援学校(H22) (芦屋市)
 東灘区(本庄・魚崎・本山南中学校区)
 (知/小・中・高)

青陽須磨支援学校(H21)
 須磨区・垂水区(桃山台・塩屋・垂水東・福田・垂水中学校区)
 (知・肢/小・中・高)

灘さくら支援学校(R3)
 (知) 東灘区(本庄・魚崎・本山南中学校区を除く)・灘区・中央区
 (肢) 東灘区・灘区・中央区
 (知/小・中) (肢/小・中・高)

県立神戸聴覚特別支援学校(S6)
 県内全域(聴/保・幼・小・中・高)

盲学校(S14)
 市内全域(視/幼・小・中・高(本科・専攻科))

県立視覚特別支援学校(M38)
 県内全域(視/幼・小・中・高(本科・専攻科))



2. 障害種別から捉えた課題

- 知的障害、肢体不自由については令和3年度までの学校再整備をもって一定の整理ができた。
- しかし、「視覚障害」「聴覚障害」「訪問学級（病弱・肢体不自由）」については課題解決がなされていない。
 - ① 視覚障害 市立盲学校の幼児・児童生徒数の減少への対応
 - ② 聴覚障害 「人工内耳」の子供が増加するなかで拠点校聴覚特別支援学級を含めたあり方の検討
 - ③ 訪問学級 病弱訪問教育部（友生支援学校）、在宅肢体不自由訪問教育部（いぶき明生支援学校）のあり方についての検討



令和4年度の予定

- 第1回（6月9日） 課題の整理と視覚障害に関する意見聴取
- 第2回（9月下旬） 聴覚障害に関する意見聴取
- 第3回（12月中旬） 訪問学級に関する意見聴取・これまでの意見整理
- 第4回（2月中旬） 今年度の課題 意見集約とまとめ
次年度の課題についての提案



3. 視覚障害について

市立盲学校

(対象) 神戸市に在住する幼児児童生徒

(設置学部) 幼稚部・小学部・中学部・高等部

令和4年度市立盲学校児童生徒数内訳 (○は学年)

幼	小学部						中学部			高等部												合計
										本科						専攻科						
										普通科			保健理療科			保健理療科			理療科			
	①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	
0名	1	1	0	1	2	1	1	0	1	3	1	3	1	0	0	1	0	2	1	0	2	
	6名						2名			7名			1名			3名			3名			22名

・幼稚部・小学部・中学部・高等部普通科では、普通校に準ずる教育に加え、点字の勉強や日常生活指導など視覚障害の困難を改善・克服するための「自立活動」を実施。

・高等部専攻科では、高校卒業資格を有する生徒に対し、「あんまマッサージ指圧師」等の資格取得を目指す専門教育を実施。



市立盲学校 (S14開校、S63現校舎完成)

(神戸市中央区東川崎町)

市内全域 (視/幼・小・中・高(本科・専攻科))

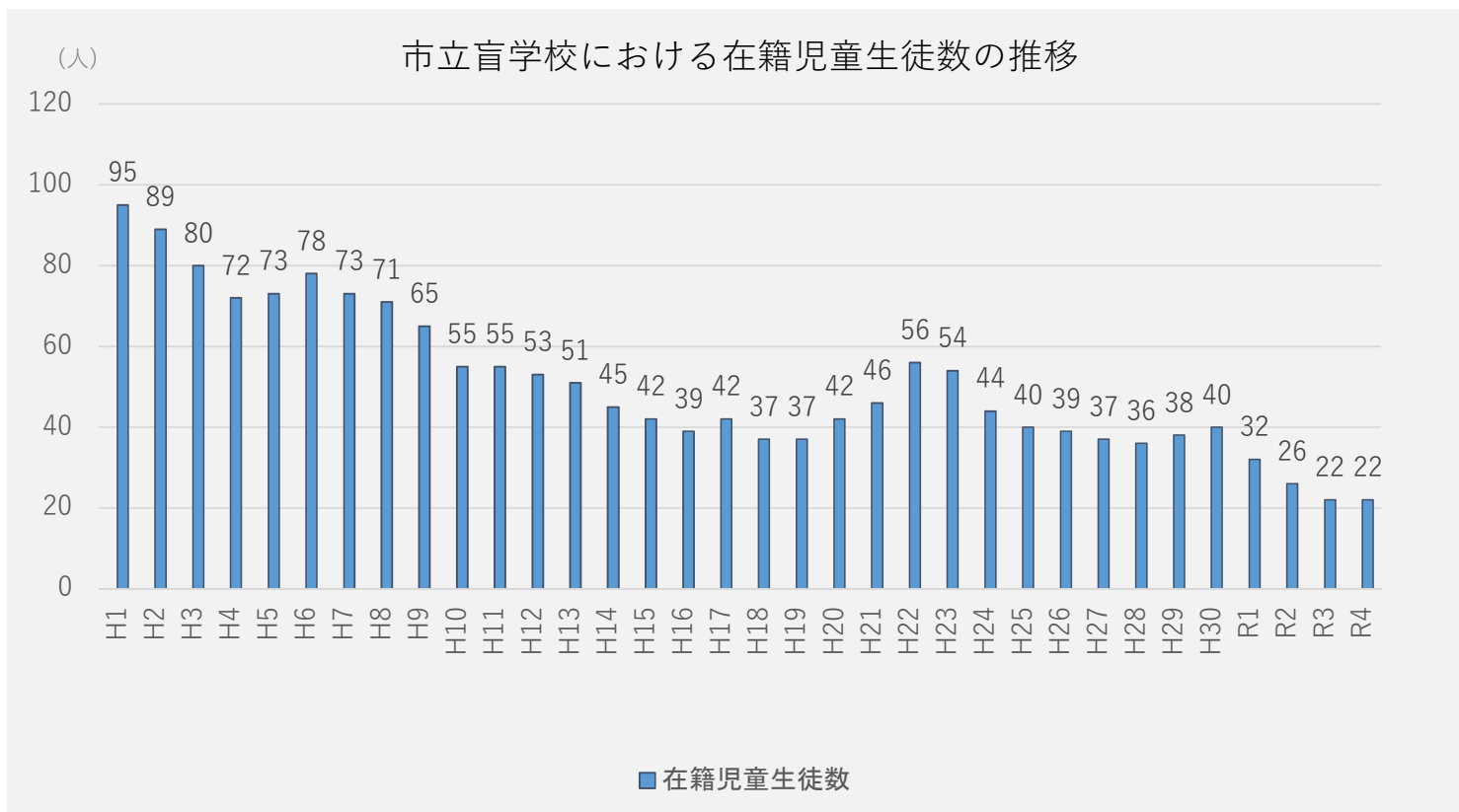
校舎面積(4,629㎡) 運動場面積(2,530㎡)

屋内プール、エレベーター等の設備有



市立盲学校における在籍児童生徒数の推移

- 国全体として少子化の傾向にあることに加え、医学の進歩による視覚障害児の発生率の低下。
- インクルーシブ教育の浸透が進み、地域の小中学校へ児童生徒が流れている傾向にある。

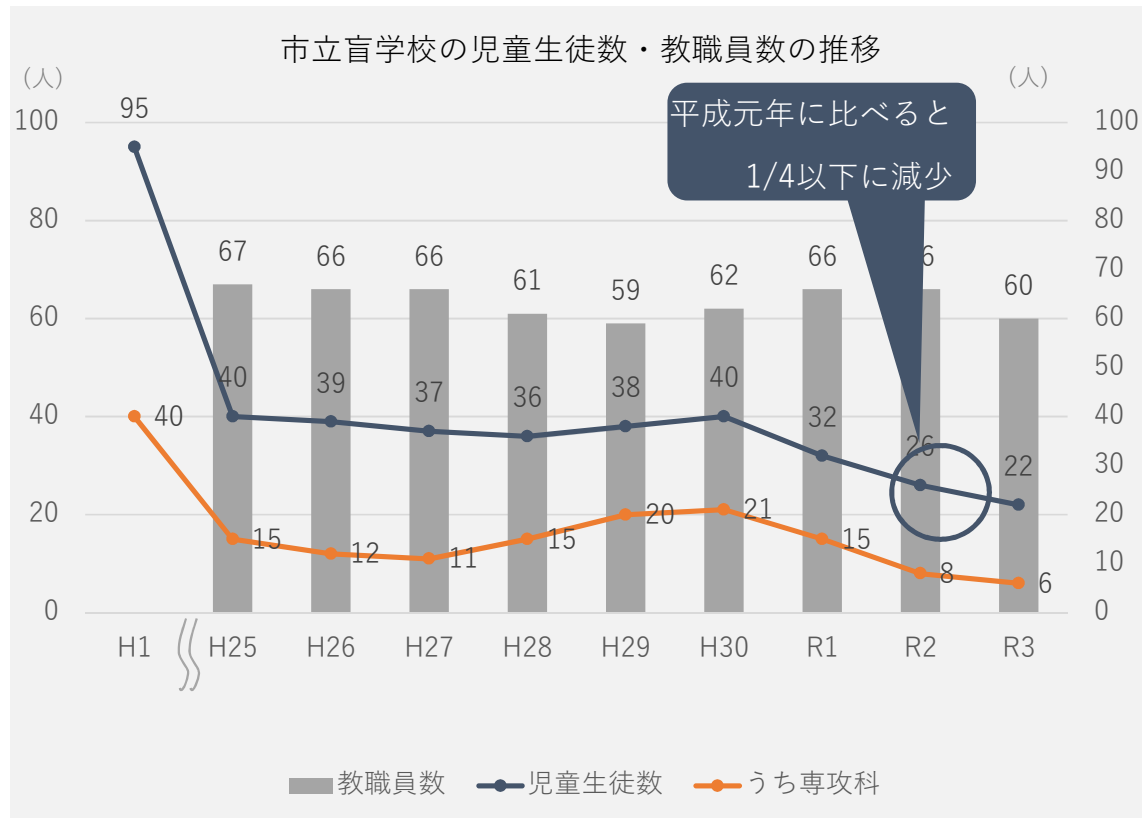


(参考) 拡大教科書の利用児童・生徒数
(小・中学校 特別支援学級含む)

年度	H30	R1	R2	R3	R4
小学校	9名	11名	5名	6名	7名
中学校	7名	6名	7名	6名	3名
合計	16名	17名	12名	12名	10名

市立盲学校に通う児童生徒数の減少

- 市立盲学校に通う児童生徒数が減少傾向
- 高卒以上で「あん摩マッサージ指圧師」等の資格取得を目指す「専攻科」の人数も減少傾向

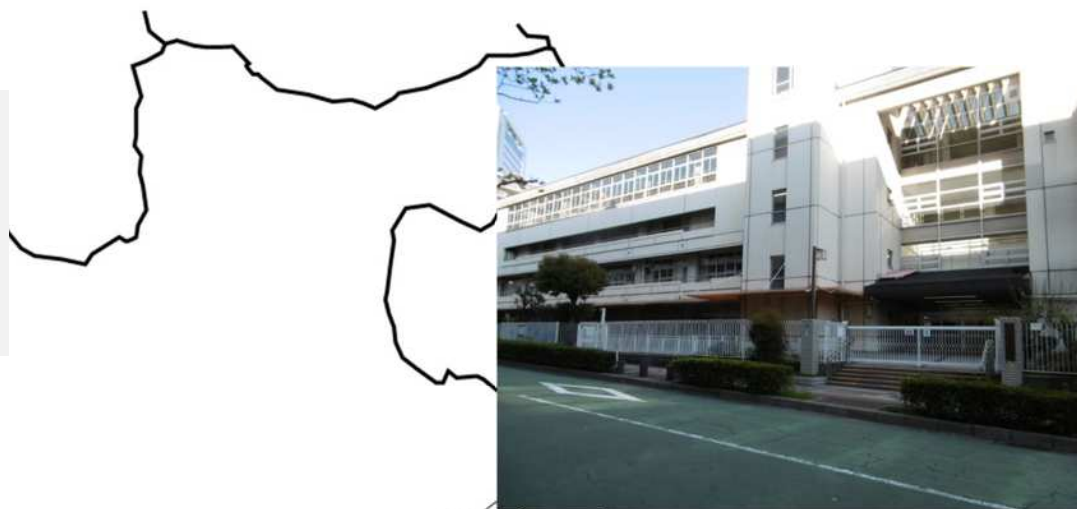


- ・ 児童生徒数の減少
 - ・ 建物老朽化（昭和63年現校舎完成、築33年）
- 上記の課題に対応する必要がある。

神戸市内の視覚障害部門のある特別支援学校

市内には視覚障害部門のある特別支援学校が2校

- ・市立盲学校
- ・県立視覚特別支援学校



市立盲学校（S14開校、S63現校舎完成）
（神戸市中央区東川崎町）
市内全域（視／幼・小・中・高(本科・専攻科)）



県立視覚特別支援学校（M38開校、S63本校舎完成）
（神戸市垂水区城が丘）
県内全域（視／幼・小・中・高（本科・専攻科））

○全国の視覚特別支援学校（併置校の現状）

盲複数の障害種に対応した学校：5校）

- ・東京都立久我山青光学園（視覚・知的）
- ・神奈川県立相模原中央支援学校（視覚・聴覚・肢体・知的）
- ・富山県立富山視覚総合支援学校（視覚・病弱（高普））
- ・山口県立下関南総合支援学校（視覚・聴覚・肢体・知的・病弱）
- ・福岡県立柳河特別支援学校（視覚・肢体・病弱）

県立特別支援学校における教育環境整備方針（抜粋）

3 障害種別ごとの本県の教育における現状と課題、取組の方向

障害種別	県立校数	在籍者数	現状	課題等	取組の方向
視覚	1校	横ばい	・全県の視覚障害教育を担う（センター的機能を含む） ・広域な通学区域、寄宿舎設置	・一人一人に応じた教育や地域支援のニーズにも対応できる教員の専門性の確保 ・校舎及び寄宿舎の老朽化	・短期的な見通しに加え、長期的な視点での人材育成及び人事交流 ・改修、改築を実施する際は老朽化解消の限定対応のみならず、複数障害種別校への再編等、抜本的な対応も視野に入れて検討
聴覚	5校	減少傾向	・小中学校の聴覚学級増加 ・全体的には減少傾向だが、重複障害のある児童生徒は増加傾向	【聴覚支援のあり方検討会意見への対応】 ・早期支援の充実のため、聴覚障害教育の中核となるセンター的機能の強化 ・適正な学習集団の確保 ・障害の重症・重複化、多様化に対応した指導ができる教職員の育成、研修の機会や場の確保	・聴覚特別支援学校の聴覚支援センター活用の充実 →保健医療福祉と連携したフリースタッフ支援体制 ・関係機関との連携を強化（外部人材） ◎むごがわ特別の整備 （阪神地域の聴覚障害教育の拠点校として整備） ◎豊岡聴覚と出石特別の統合を検討 （但馬地域の聴覚障害教育の拠点校として機能強化） ・短期的な見通しに加え、長期的な視点での人材育成及び人事交流
知的	22校	地域により増加	・一次計画、二次計画により整備推進 ・三次計画推計では、豊神、神戸地域で大幅増加、淡路地域は減少 ・特別教室の転用や仮設校舎整備等で普通教室を確保 教育活動に制限が生じている学校もある	・教職化が著しい阪神地域での整備推進 在籍者数増加に伴う専任教員の不足等 学校状況化への対応や教育環境の改善 ・教職化が進む東播磨地域での整備検討 ・地域の実情等を踏まえた対応や検討 障害児入所施設等の再編による、在籍者数の増減等	◎むごがわ特別の整備（再掲）（芦屋特別の状況化解消） ◎阪神北地域新設の整備（こやの里特別の状況化解消） ◎いなみ野及びはりまの対応の検討 （旭元市町と連携し、統廃合校の施設活用等を含め整備手法を検討） ◎出石特別と豊岡聴覚の統合を検討（再掲） （小～高等部までの知的障害教育の一貫した支援体制の充実等） ・障害児入所施設設備校の対応 （在籍者数の増減ある学校は、今後の動向を注視し対応を検討） ・高等特別と上野ヶ原の効果的な施設活用の検討 （同一敷地内にあり、施設共用等教育充実のため効果的な活用方法を検討）
肢体	4校（加東併用）	横ばい	・重複障害等、多様な教育的ニーズに対応 肢体不自由と知的の重複障害児童生徒が教育的ニーズにより、居住地域隣の知的障害特別支援学校に在籍する例あり。 ・広域な通学区域 寄宿舎設置 （小・中高：和田山、高：播磨）	・隣接医療機関の移転により、医療との連携が困難 ・のじぎく特別わかあゆ分教室はH26～在籍者0 今後も見込みなし ・校舎及び寄宿舎の老朽化	○播磨特別職業科を総合ビジネス科に学科改編（R4～）済 ・理学療法士、作業療法士等、専門家との連携を強化（外部人材の活用） ・知的障害特別支援学校在籍児童生徒も含め、高度な医療的ケアの対応 ・のじぎく特別わかあゆ分教室の閉室を検討 対象児童生徒は、のじぎく特別本校あるいは近隣校で就学受入れ ・改修、改築を実施する際は老朽化解消の限定対応のみならず、地域の実情等も踏まえ、複数障害種別校への再編等、抜本的な対応も視野に入れて検討
病弱	1校（岡内2）	減少傾向	・入院専門治療施設として、県内外からの入院患者へ教育を提供 ・本校病弱部門単一障害児童生徒減少傾向	・県立リハビリテーション中央病院及び県立ひょうごこころの医療センターに入院する、小笠原、ひきこもり、聴覚障害等、思春期の心の問題に関するニーズのある児童生徒が増加傾向、教職員の専門性確保 ・医療機関との連携等による専門性の確保	○のじぎく特別に病弱部門（県立リハビリテーション中央病院内）の設置を検討 （施設近隣校に病弱部門を設置することにより、専門性のある教職員を確保） ・上野ヶ原と高等特別との効果的な施設活用の検討（再掲）

障害種別 視覚

（現状）

- ・全県の視覚障害教育を担う（センター的機能を含む）

（課題等）

- ・一人一人に応じた教育や地域支援のニーズにも対応できる教員の専門性の確保

（取り組みの方向）

- ・短期的な見通しに加え、長期的な視点での人材育成及び人事交流
- ・改修、改築を実施する際は老朽化解消の限定対応のみならず、複数障害種別校への再編等、抜本的な対応も視野に入れて対応

難聴幼児児童生徒の状況調査(R2との比較)

特別支援教育課

1. 調査1 幼児児童生徒の状況について

(1)対象

	幼稚園	小学校			中学校		
		通常の学級	特別支援学級	難聴学級	通常の学級	特別支援学級	難聴学級
R2	5	78	11	5	54	3	8
R3.4.1見込み	計5	計94			計65		
R4	2	80	14	7	53	2	6
R4.8.1現在	計2	計101			計61		

(2)人工内耳と補聴器の装用について

	幼児			小学生			中学生		
	人工内耳	補聴器	装用なし	人工内耳	補聴器	装用なし	人工内耳	補聴器	装用なし
	併用()			併用()			併用()		
R2	1	4	1	11	66	23	11	32	31
	併用(1)			併用(6)			併用(9)		
R4	0	1	1	12	65	28	11	30	26
	併用なし			併用(4)			併用(6)		

(3)通級の利用

	幼児		小学生			中学生		
	きとこ	なし	きとこ	神戸聴覚	なし	きとこ	神戸聴覚	なし
R2	0	5	52	2	40	2	9	54
R4	2	0	48	1	31	0	14	39

(4)FMマイク・支援員の活用状況

	幼児					小学生					中学生				
	FMマイク		支援員			FMマイク		支援員			FMマイク		支援員		
	あり	なし	あり	必要なし	必要だが いない	あり	なし	あり	必要なし	必要だが いない	あり	なし	あり	必要なし	必要だが いない
R2	1	4		2	3	40	54	8	80	6	14	51	11	53	1
R4	1	1		1	1	44	57	20	74	7	17	44	6	51	5

(5)利用しているFMマイクの種類と所有状況

	幼稚園				小学校				中学校			
	ロジャー		それ以外		ロジャー		それ以外		ロジャー		それ以外	
	園	園児	園	園児	学校	児童	学校	児童	学校	生徒	学校	生徒
R2		1			26	13	1		9	3		2
R4	1				29	15		1	8	5		4

2. 調査2 環境整備について

(1) FMマイクを学校備品として確保している

	R2	R4
幼稚園		1園
小学校	23校	26校
中学校	5校	6校

(2) FMマイクを整備したが児童生徒が卒業し、使用していないものがある

	R2	R4
	1校(2台)	5校(9台)

(3) FMマイクを整備したが対象児童が進学する際に、中学校に引き継いだ

	R2	R4
小学校		3校(3台)

(4) テニスボールを机椅子の足につけている教室がある

	R2	R4
ある	66	166

(5) テニスボール以外の消音効果のあるキャップを机椅子の足につけている教室がある

	R2	R4
ある	11	11

(6) 定期考査等でのききとりテストを別室で実施している児童生徒がいる

	R2	R4
いる	14	15

(7) 専門家や関係機関（ひばりクラスや通級指導教室等）の巡回指導を受けている

	R2	R4
幼稚園		3
小学校	25	25
中学校	12	12

(8) 校内で難聴に関する職員対象の研修をしている

	R2	R4
している	26	24

(9) 校内で難聴に関する児童生徒対象の学習をしている

	R2	R4
している	13	10

令和4年度難聴幼児児童生徒の状況調査

特別支援教育課

1. 調査について

(1)調査対象

- ①幼稚園 31園 八多幼稚園はR4休園
- ②小学校 163校 桜の宮分校は桜の宮小に含む
- ③中学校 82校 西野分校は丸山中、桜の宮中分校は桜の宮中、北分校は兵庫中に含む

(2)調査内容

- ・調査1：難聴幼児児童生徒の状況について
- ・調査2：環境整備について

3. 調査1 幼児児童生徒の状況について

(1)幼稚園

(1)-1 年齢内訳

区	補聴器等	(人)	3歳	4歳	5歳
	人工内耳	0			
東灘	補聴器	1			1
中央	なし	1			1

(1)-2 支援等の状況

幼児			FMマイク等		通級による指導		支援員の活用		
			活用あり	なし	きこえとことば	県立神戸聴覚	なし	活用あり	必要なし
	人工内耳	0							
東灘	補聴器	1	1		1				1
中央	なし	1			1			1	

※FMマイク1はロジャー（園所有）

(2)小学生

(2)-1 学年内訳【全市】101(人)

小学生			1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	
通常の学級 (80人)	人工内耳	5	1		3			1	
	補聴器	53(3)	6	8	13(2)	8	8	10(1)	
	人工内耳と併用(3)								
	なし	25	6	9	5	2	1	2	
特別支援学級 (14人)	人工内耳	2		1			1		
	補聴器	10(1)	2		3	3	2(1)		
	人工内耳と併用(1)								
	なし	3			1	1		1	
難聴学級* (7人)	人工内耳	5	1	1	1	1		1	
	補聴器	2					2		
	なし	0							
			101	16	19	24	15	13	14

*神戸祇園小

(2)-1 学年内訳【区別】

①通常の学級(80人)

			1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	
東灘 16	人工内耳	0							
	補聴器	13		4	1	2	5	1	
	なし	3		2	1				
灘 6	人工内耳	1			1				
	補聴器	5	1			2		2	
	なし	0							
中央 4	人工内耳	0							
	補聴器	2		1	1				
	なし	2	1		1				
兵庫 4	人工内耳	0							
	補聴器	3		1		1		1	
	なし	1	1						
北 13	人工内耳	0							
	補聴器	9	1		5	2		1	
	なし	4	2	2					
長田 1	人工内耳	0							
	補聴器	0							
	なし	1					1		
須磨 14	人工内耳	0							
	補聴器	7		2		1	3	1	
	なし	7	1	3	1	1		1	
垂水 15	人工内耳	3	1		2				
	補聴器	9						2	
	人工内耳と併用(2)		2		5(2)				
	なし	5	1	1	2			1	
西 7	人工内耳	1						1	
	補聴器	5(1)						2(1)	
	人工内耳と併用1		2		1				
	なし	2		1		1			
			80	13	17	19	10	9	12

②特別支援学級(14人)

			1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
東灘 2	人工内耳	0						
	補聴器	2			1	1		
	なし	0						
灘 1	人工内耳	0						
	補聴器	1				1		
	なし	0						
中央 0	人工内耳	0						
	補聴器	0						
	なし	0						
兵庫 2	人工内耳	0						
	補聴器	1				1		
	なし	1				1		
北 2	人工内耳	0						
	補聴器	2	2					
	なし	0						

			1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	
長田 3	人工内耳	2		1			1		
	補聴器	2(1)			1		1(1)		
	人工内耳と併用(1)								
	なし	0							
須磨 1	人工内耳	0							
	補聴器	1					1		
	なし	0							
垂水 3	人工内耳	0							
	補聴器	1			1				
	なし	2			1			1	
西 0	人工内耳	0							
	補聴器	0							
	なし	0							
			14	2	1	4	4	2	1

(2) -2支援等の状況

①全市

児童(人)				FMマイク等		通級による指導			支援員の活用		
				活用あり	なし	きこえとことば	県立神戸聴覚	なし	活用あり	必要なし	必要だがいない
全市 101	通常の学級 (80)	人工内耳	5	5		4		1	1	4	
		補聴器	53(3)	33(3)	20	37(2)	1	15(1)	1	48(3)	4
		人工内耳と併用(3)									
		なし	25			9		16	2	21	2
	特別支援学級 (14)	人工内耳	2		2				2		
		補聴器	10(1)	2	8(1)				7(1)	2	1
		人工内耳と併用(1)									
	なし	3						1	2		
	難聴学級 (7)	人工内耳	5	5					5		
		補聴器	2	2					2		
なし		0									

②区ごと

児童(人)				FMマイク等		通級による指導			支援員の活用		
				活用あり	なし	きこえとことば	県立神戸聴覚	なし	活用あり	必要なし	必要だがいない
東灘 18	通常の学級 (16)	人工内耳	0								
		補聴器	13	10	3	10		3		13	
		なし	3			1		2		3	
	特別支援学級 (2)	人工内耳	0								
		補聴器	2		2				1	1	
		なし	0								
灘 7	通常の学級 (6)	人工内耳	1	1		1			1		
		補聴器	5	4	1	4		1		5	
		なし	0								
	特別支援学級 (1)	人工内耳	0								
		補聴器	1		1				1		
		なし	0								

児童（人）				FMマイク等		通級による指導			支援員の活用			
				活用あり	なし	きこえとことば	県立神戸聴覚	なし	活用あり	必要なし	必要だがいない	
中央 4	通常の学級 (4)	人工内耳	0									
		補聴器	2		2	1		1	1	1		
		なし	2			2				2		
	特別支援学級 (0)	人工内耳	0									
		補聴器	0									
		なし	0									
兵庫 13	通常の学級(4)	人工内耳	0									
		補聴器	3	1	2	2		1		1	2	
		なし	1		1	1					1	
	特別支援学級 (2)	人工内耳	0									
		補聴器	1		1					1		
		なし	1		1					1		
	難聴学級(7)	人工内耳	5	5					5			
		補聴器	2	2					2			
		なし	0									
北 15	通常の学級 (13)	人工内耳	0									
		補聴器	9	4	5	7		2		9		
		なし	4		4			4		3	1	
	特別支援学級 (2)	人工内耳	0									
		補聴器	2	1	1				2			
		なし	0									
長田 3	通常の学級(1)	人工内耳	0									
		補聴器	0									
		なし	1		1			1		1		
	特別支援学級 (3)	人工内耳	2		2				2			
		補聴器	2(1)		2(1)				2(1)			
		人工内耳と併用(1)										
須磨 15	通常の学級 (14)	人工内耳	0									
		補聴器	7	5	2	7				7		
		なし	7	1	6	3		4		7		
	特別支援学級 (1)	人工内耳	0									
		補聴器	1		1				1			
		なし	0									
垂水 18	通常の学級 (15)	人工内耳	3	3		3				3		
		補聴器	9(2)		3	5(2)	1	3		8(2)	1	
		人工内耳と併用(2)		6(2)								
	特別支援学級 (3)	なし	5		5	3		2	2	3		
		人工内耳	0									
		補聴器	1	1							1	
西 7	通常の学級 (7)	なし	2		2			2		2		
		人工内耳	1	1				1		1		
		補聴器	5(1)		2	1		4(1)		4(1)	1	
	特別支援学級 (0)	人工内耳と併用(1)		3(1)								
		なし	2		2			2		2		
		人工内耳	0									
	補聴器	0										
	なし	0										

(3) FMマイクの種類と所有状況

	児童	学校
ロッジャー	44	29
その他	1	0

※FMマイクを所有していても
利用していない場合もある。

(3)中学生

(3)-1 学年内訳【全市】61(人)

生徒(人)		1年生	2年生	3年生	
通常の 学級 (53)	人工内耳	8	1	5	2
	補聴器	24	9(1)	9(2)	6(1)
	人工内耳と併用(4)				
	なし	25	12	7	6
特別支 援学級 (2)	人工内耳	0			
	補聴器	1			1
	なし	1	1		
難聴学 級* (6)	人工内耳	3	1		2
	補聴器	5		1	4(2)
	人工内耳と併用(2)				
	なし	0			
		61	23	20	18

* 湊翔楠中

(3)-1 学年内訳【区別】

①通常の学級(53人)

		1年生	2年生	3年生	
東灘 5	人工内耳	3		1	2
	補聴器	3(1)		2	2(1)
	人工内耳と併用(1)				
	なし	0			
灘 4	人工内耳	1		1	
	補聴器	1(1)		1(1)	
	人工内耳と併用(1)				
	なし	3	3		
中央 2	人工内耳	0			
	補聴器	1		1	
	なし	1			1
兵庫 4	人工内耳	0			
	補聴器	0			
	なし	4	3	1	
北 8	人工内耳	2	1	1	
	補聴器	5(2)	1(1)	4(1)	
	人工内耳と併用(2)				
	なし	3	2	1	
長田 6	人工内耳	0			
	補聴器	4	3		1
	なし	2		2	
須磨 5	人工内耳	1		1	
	補聴器	3	2		1
	なし	1			1
垂水 10	人工内耳	0			
	補聴器	6	3		3
	なし	4		2	2
西 9	人工内耳	1		1	
	補聴器	1		1	
	なし	7	5		2

②特別支援学級(2人)

		1年生	2年生	3年生
	人工内耳	0		
須磨	補聴器	1		1
中央	なし	1		

(2) 支援等の状況

①全市 (61人)

				FMマイク等		通級による指導		支援員の活用		
生徒 (人)				活用あり	なし	県立 神戸聴覚	なし	活用あり	必要なし	必要だが いない
全 市 (6 1)	通常 の 学級 (53)	人工内耳	8	8		3	5		6	2
		補聴器	24(4)	12(4)	12	11(1)	13(3)	1	20(4)	3
		人工内耳と併用(4)								
		なし	25			1	24	25		
	特別支 援学級 (2)	人工内耳	0							
		補聴器	1					1		
		なし	1					1		
	難聴学 級(6)	人工内耳	3					3		
		補聴器	5(3)	1	4(3)			5(3)		
		人工内耳と併用3								
		なし	0							

②区ごと

				FMマイク等		通級による指導		支援員の活用		
生徒 (人)				活用あり	なし	県立 神戸聴覚	なし	活用あり	必要なし	必要だが いない
東 灘 5	通常 の 学級 (5)	人工内耳	3	3		1	2		5	
		補聴器	3(1)	2(1)	1	1	2(1)		3	
		人工内耳と併用(1)								
		なし	0							
灘 4	通常 の 学級 (4)	人工内耳	1	1		1			1	
		補聴器	1(1)							
		人工内耳と併用(1)								
		なし	3			3		3		
中 央 3	通常 の 学級 (2)	人工内耳	0							
		補聴器	1	1		1		2		
		なし	1			1				
	特別支 援学級 (1)	人工内耳	0							
補聴器		1	1				1			
なし		0								
兵 庫 4	通常 の 学級 (4)	人工内耳	0							
		補聴器	0							
		なし	4			4		4		
北 8	通常 の 学級 (8)	人工内耳	2	2			2		2	
		補聴器	5(2)	3(2)	2		5		3(2)	2
		人工内耳と併用(2)								
		なし	3			3		3		

				FMマイク等		通級による指導		支援員の活用		
				活用あり	なし	県立 神戸聴覚	なし	活用あり	必要なし	必要だが いない
長 田 6	通常の 学級 (6)	人工内耳	0							
		補聴器	6	2	4	1	5		5	1
		なし	0							
須 磨 5	通常の 学級 (4)	人工内耳	1	1		1				1
		補聴器	3	2	1	3		1	2	
		なし	1						1	
	特別支 援学級 (1)	人工内耳	0							
		補聴器	0							
		なし	1		1				1	
垂 水 10	通常の 学級 (10)	人工内耳	0							
		補聴器	6	2	4	4	2		6	
		なし	4				4		4	
西 9	通常の 学級 (9)	人工内耳	1		1		1			1
		補聴器	1		1		1		1	
		なし	7			1	6		7	

(3) FMマイクの種類と所有状況

機種/所有状況		生徒	学校
ロジャー	13	5	8
その他	4	4	0

※FMマイクを所有していても
利用していない場合もある。

3. 調査2 環境整備について

(1) FMマイク

	幼稚園		小学校		中学校	
①学校園備品として確保している	1園	1台	26校	46台	6校	14台
②対象児童の卒園・卒業後使用していない			3校	3台	2校	6台
③児童生徒の進学・転学で引き継いだ			3校	3台		

(2) 教室の机椅子へのテニスボールの装着

	幼稚園	小学校	中学校
①テニスボール	2園	121校	43校
②その他消音効果のあるキャップ		10校	1校

(3) その他

	幼稚園	小学校	中学校	
①定期考査(聞きとりテスト)等を別室で実施			15校	24人
②関係機関等の巡回指導を受けている	3園	25校	12校	
③難聴に関する職員研修の実施		15校	9校	
④難聴に関する児童生徒の学習を実施		6校	4校	

(4) 学校園対応・困りごと

幼	ロジャーを使用することで教師の指示は通りやすくなった。しかし、友達の会話は聞き取りづらいのではないと思う。どこまで理解できているのかわかりづらい。
小	難聴ではないが聴覚過敏のため別室で学習している児童がいる。本人は自分所有のイヤホンを使用。程度の差があるが聴覚過敏の児童は増えている。また、来年度入学予定の児童に難聴児童がいるので、入学前にFMマイクやテニスボールの椅子への装着など環境を整えないといけない。
	該当の児童は、自校通級で自立活動をしている。支援員は学習サポートを主にしている。今後は、特別支援学級入級も視野にいれている。
	口元の見えるマスクを使用すべきか迷う。マスクの曇り具合、どの程度読唇を必要としているのか判断に迷う。
	授業場面で必要な支援が行き届かない（個別の指示等）。支援員が不足している。
	消音効果のため装着するテニスボールが手に入らない。
	ロジャーは個人持ちだが、マイクの方を担当等が破損させてしまった場合に困るので、同じものを学校で用意したいが高価である。
	(西須磨) 教室配置の際、対面の教室を対象児童の在籍学級にできないので困っている。防音などの設備があればよいのだが。
中	専属の支援員がおらず、補聴器を外す水泳学習の時に支援が不十分になる。
	難聴ではなく聴覚情報処理障害との診断のある児童。補聴器を使い始めてまだ日が浅く様子を見ながら対応を検討中。
	テニスボールの穴あけ作業、入級基準を委員会が明示してくれない、1人で校内・校外の難聴に関することを請け負っている。
	1年：「心因性難聴」。2年：「突発性難聴」疑い。両名とも学校生活内において支障なし。
	No.2の生徒は個人でもFMマイクを所有しているが、学校では主に学校備品のFMマイクを使用。
	困っているというわけではないが、片側の耳が高度の難聴の生徒への健康な方の耳への配慮や普段できる配慮などあれば教えてほしい。
	体育館のパイプ椅子の音が気になるが対応できていない。
	学習の力、感情や行動のコントロールの力に課題が見られるが、それが聴力の問題なのかその他の問題なのかの判断が難しい。
	生徒の都合で話しを聞いていたり聞いていなかったりとむらがあることに困っている（県立聴覚支援学校の先生に報告・相談済）。
生徒は「聞こえにくい」という状況で学校生活に大きな影響はない。現在のところ困っていること等はない。	
生徒は人工内耳・補聴器はないが聞こえが悪く定期的に通院している。	
本人にとって都合の悪いことは聞こえていないふりをするので、本当に聞こえていないのかどうなのかを把握しきれない。保護者から聞いた話を校内研修として職員間で周知しているが、職員に専門的な知識が乏しく、障害に対する認識を深める必要があると感じている。	

(5) 工夫していること

小	今年度は水泳の学習があったので、事前にきこえとことば教室の先生と話をした。補聴器をつけて学習が進められないので、何をするかを指示をラミネートしたり、ホイッスルだけではなく低い音のタンバリンを使用したりした。
	右耳難聴のため、座席を配慮する対応を行っている。また、聴力検査に関しては、保護者の意向に沿い、プライバシーに配慮した上でやっている。支援員の活用について、現時点では必要がないと判断し活用していないが、今後必要性が出てくる可能性も十分にある。
	校区で県立聴覚支援学校に通学している1年生がおり、将来的に本校に転学予定。現在は学期に1回程度の居住地交流を行っている。
中	片耳難聴のため、聞き取りやすいよう、座席の配慮をしている。
	座席の配置を工夫することで授業やリスニングテスト等に困り感を感じていない。
	対象の生徒はいないが今後に備える必要がある。

(6) 要望

小	R6年度入学予定の子で難聴で人工内耳をつけているお子さんが入学予定。事前準備で必要なものがあれば知っておきたい。
	来年度以降本校に入学を希望される難聴児の家庭に対して、まず最初は特別支援教育相談センターで就学相談ができる体制を整えてほしい。センターで相談を経てから本校での就学相談という流れを確立して頂きたい。
中	困っているというわけではないが、片側の耳が高度の難聴の生徒への健康な方の耳への配慮や普段できる配慮などあれば教えてほしい。

資料2

きこえとことばの教室での取組みと実践



神戸市拠点校通級指導教室のあゆみ

- ・昭和41年 通級指導に着手（設置校園長会の指導の下、運営）
- ・昭和46年 幼稚園教諭を教室に配置
- ・平成18年 LD・ADHD等も指導対象に
- ・現在、14教室 きこえとことばの教室 8教室
そだちとこころの教室 6教室
（中学校担当者は6教室に配置）
- ・高等学校担当者は3名。市立高等学校8校に巡回による指導を実施。

合計 72名の通級担当者を配置

きこえとことばの教室所在地図



きこえとことばの教室 指導内容

構音指導

- ・身体全体の運動
- ・口腔周辺の運動
- ・正しい発音の仕方
- ・聞き分ける力



難聴指導

- ・聴力検査
- ・補聴器の活用
- ・聴覚活用
- ・語彙の拡充



遊びの指導

- ・子供の気持ちに添ったことばがけ
- ・親子遊び
- ・吃音の子供への指導



ことばの指導

- ・聞く・見る
- ・ソーシャルスキル
- ・文字の読み書き



難聴の子供につけたい力

- 自分の周りに様々な種類の音があることに気付く。
- 音・ことばを聞こうという気持ちが育つ。
- 聞くべき音・ことばへ注目する大切さに気付く。
- ことばを使って情報を得る楽しさや便利さを感じる。
- ことばを中心として聞いたものを記憶しておく力が育つ。
- ことばを使って伝える楽しさや、うれしさを感じる。
- 話すときの文の組み立てや使い方を知る。
- 相手の意図や気持ちの理解ができる。 等



きこえとことばの教室での 難聴の子供の指導

①補聴器・人工内耳の機器（サウンドプロセッサ）の取り扱いができる。

→故障の有無、電池の量の確認など担当者も音を聞いて確認する。

②自分の聴力の状態を知り、その日の様子を確認する。

→聴力測定を行い、必要であれば医療機関につなぐ。

③様々な環境音（身の回りの音）を知る。

→CD等で様々な音を聞かせて、絵を見ながら質問したり、話したりする。



きこえとことばの教室での 難聴の子供の指導

④物や動き、表現などの名称を知る。

→絵カード、ことばの絵辞典、ICTの視聴覚教材などを使って語彙を増やし、実際に使って子供とやりとりをする。

⑤聞くべき音やことば、話している人に注目できる。

→単語や短い文章を聞かせて、誤っているところに注目させたり、複数の言葉を聞かせて覚える練習をさせる。
話している人の表情や動き、口の動きなどから内容を推測させたり、正確につかんだりする力をつける。

きこえとことばの教室での 難聴の子供の指導

⑥ ことばから情報をつかむコツを知る。

→文章を読み、内容を把握する練習をする。その後、質問をして内容を答えさせたり、一緒に話したりする。

⑦ 簡単な話し方の基本を知る。簡単な文が作れる。

→絵カードを2～3枚使って、文を作らせたり、5W1Hを意識させながら、文や話を作る練習をさせる。



きこえとことばの教室での 難聴の子供の指導

⑧ 相手の意図や気持ちが分かる (得られる情報の不足から、社会性の伸びが不十分なことがある)。

→ SST教材などを活用し、こういう場面では相手はどう感じるのかを踏まえ、どのように行動したり話したりするのが良いのかを一緒に考える。

⑨ 発音が正しくできる。

→ 本人の聞こえの様子に配慮しながら発音の練習を行う。





きこえとことばの教室での 難聴の子供の指導



在 school 園との連携

- その子の現在の成長や聞こえの様子などを踏まえて、在籍校
園でうまく活動できるように、校長先生やコーディネーター
の先生、担任の先生と情報交換をしながら指導を進めています。
- 幼稚園から小学校、小学校から中学校といった子供・保護者
の不安な時期にあらかじめ、その子の「聞こえ」等の情報を引
き継ぎ、安心感をもって入学できるようお手伝いをしています。

在籍校園での支援

その他

- 最近では、補聴器等、聞こえにくさを補償する機械の技術が進歩してきたこともあり、小さい頃から、話している人の方を向かずに過ごしてしまう子供も多くみられる。
そうした場合、さらに相手の表情や周りの様子を把握せずに過ごしていくため、音声は届いているが社会性の伸びが不十分になることがある。そこで、できるだけ話している人の方を見て、ことば以外の情報も集めていくように工夫する必要がある。
- 一側性難聴（片耳難聴）では、片耳が正常のため、補聴器などを利用していない場合も多い。音の選択性が弱いために、ざわざわとした場面では、聞き取りができないことが多い。そのため、先生が話したり、発表者が話したりする時には、周りが静かにする環境を作ることが大切になる。

連携の重要性



- 幼児期の担任の先生方の気づきから、きこえとことばの教室につながり、難聴が発見された子供がいます。
- クラスの様子を教えていただけることで、きこえとことばの教室での指導を工夫したり、きこえとことばの教室で学んだことをクラスで発揮したりできる子供がいます。
- ☆気になることがあれば、いつでも地域のきこえとことばの教室に、ご連絡をいただくとありがたいです。

第2回 神戸市就学・教育支援委員会

いずれ社会で生きていく
子どもたちのために
～難聴の子どもたちの教育環境を考える～

兵庫県立聴覚障害者情報センター
相談担当（言語聴覚士） 岡 恵子
2022年9月29日

1

本日のお話

- ①聴覚情報提供施設とは（説明省略）
- ②子どもたちとの関わり（説明省略）
- ③難聴者を取り巻く社会とは
- ④難聴児を育む 3つの力

2

①聴覚情報提供施設とは

（スライド資料をご一読ください。説明省略）

3

聴覚障害者情報提供施設

身体障害者福祉法 第34条

視聴覚障害者情報提供施設は、無料又は低額な料金で、点字刊行物、視覚障害者用の録音物、聴覚障害者用の録画物、その他各種情報を記録したものであって、専ら視聴覚障害者が利用するものを製作し、若しくはこれらを視聴覚障害者の利用に供し、又は点訳（文字を点字に訳すことをいう）若しくは手話通訳等を行う者の養成若しくは派遣その他の構成労働省令で定める便宜を供与する施設とする。

4

兵庫県の情報提供施設



兵庫県立聴覚障害者情報センター
設置：兵庫県・神戸市
運営：（公社）兵庫県聴覚障害者協会

聴覚



兵庫県点字図書館
設置：兵庫県
運営：（社福）兵庫県視覚障害者福祉協会



視覚

5

兵庫県立聴覚障害者情報センター 主な事業【ひょうご通訳センター】

手話通訳者・要約筆記者の派遣・養成事業

- ・派遣事業には種別があります。
- ・聴覚障害者は居住地の派遣窓口申請しますが、通訳を必要とする場所が市外・県外の場合、派遣窓口担当者から、ひょうご通訳センターに依頼が入ります。

・通訳とは、聞こえない人の意思を伝えるためだけでなく、聞こえる人が、聞こえない人に意思を伝えるためにも必要である（双方に必要）という考えから、イベントや会議などは、主催者が通訳者を準備すべき、という制度の考え方があります。

6

兵庫県立聴覚障害者情報センター 主な事業【相談事業】

生活相談や、暮らしに関する支援事業

- ・聴覚障害者相談員、言語聴覚士、臨床心理士が、聞こえに関するあらゆる相談に対応しています。（オンライン相談も始まっています）
- ・移動相談も行っており、開催地域で支援者対象の講座も開講しています。
- ・専門講師によるPC・IT相談も行なっています。

7

兵庫県立聴覚障害者情報センター 主な事業 【生活訓練事業・IT機器活用研修事業】

生活訓練等、暮らしに関する支援事業

- ・ろうあ者社会生活教室・難聴者教室
- ・中途失聴難聴者コミュニケーション訓練事業
- ・IT学校・パソコン講習会
- ・ICT指導者養成講座 など

聴覚障害者の生涯教育を行なっています。

8

兵庫県立聴覚障害者情報センター 主な事業【関係団体と共に】

聴覚障害者団体や手話サークル・要約筆記 サークルなどの活動支援

- ・阪神淡路大震災で災害支援を行う中、聴覚障害者の情報拠点が必要だと認識し、聴覚障害者団体と支援団体、計11の団体が共に手を携え、設立に向けて活動。情報センターの設立となりました。
- ・設立後、関係団体の組織編成に変化はありますが、「センター運営協議会」として引き続き、情報センターの事業遂行を支えています。

9

兵庫県立聴覚障害者情報センター 主な事業【映像制作事業】

聴覚障害者向け映像の自主制作、字幕や手話入り 映像作品（DVD・VHS）の貸出事業

昭和62年（1987年）8月、聴力障害者情報文化センターを核に発足した「字幕ビデオライブラリー共同機構」に賛同し、字幕付与映像作品の貸出事業を兵庫県・神戸市それぞれで実施。情報センター設立に伴い、事業委託先が移譲されました。

聴覚障害者のための用語説明や、聴覚障害向けの制度説明など、関係団体や行政機関などと協力しながら、日本語字幕、手話を付与した映像制作を行っています。制作した映像は、DVDでの貸出、映像提供、Youtubeによる配信などを行なっています。

10

兵庫県立聴覚障害者情報センター 主な事業【情報発信事業】

聴覚障害者への情報発信に関する事業 聴覚障害者向け災害等緊急時情報発信事業



「ひょうご防災ネット」を活用して、聴覚障害者向けの情報を発信しています。災害時には、聴覚障害者が日常生活に戻るための二次的情報を発信します。

聴覚障害者災害対応訓練事業も行っており、県主導で開催する避難訓練への協力、防災学習会の開催などを行なっています。

11

聴覚障害者情報提供施設の設置状況

設置数：53施設



47都道府県全てに
聴覚情報提供施設又は
類似機能をもつ施設が
設置されています。

設置政令指定都市：7/20
（札幌・横浜・川崎・名古屋
京都・堺・北九州）

2020年6月現在
引用：全国聴覚障害者情報提供施設協議会

12

②子どもたちとの関わり

～点在する聴覚障害児とご家族を結ぶため、
いろいろな取り組みを行なってきました。～
(資料のみ、説明省略)

13

点と点を結ぶため ①

「聴覚障害児とママ&パパ交流会」の開催 (H24～)

コロナ禍前は、50～60名近い参加児者家族が来られ、館内
が賑やかな子どもたちの声に溢れていました。

【R4の開催予定】

※コロナ禍のため「学習会」

開催日時：令和4年11月19日(土)午後

場 所：兵庫県立聴覚障害者情報センター

内 容：ハイブリッド式 (子どもたちの交流企画なし)

講演① 聞こえる子どもと聞こえない子どもの子育て

講演② 「聞こえるきょうだい・友達との関係」
～どの子も大切～

SODAの会代表 藤木和子氏

14

午前の様子 (H24)



聴力も失聴時期も異なる青年部の想い



補聴器したピエロとバルーンアート

15

午前の様子 (H29)



聞こえない薬剤師の想い

聞こえない子と聞こえる子が
顔合わせると、自然に筆談も始まります。



16

午後の様子 (H29)



青年部・N-Actionと一緒に
絵本「だるまさんが」遊び

長い廊下で、ボーリング大会!

17

午後の様子 (H30)



難聴協会等によるワークショップや
ST専門学生企画



ST専門学生企画「サイコロゲーム」

18

点と点を結ぶため ②

- 情報センター独自事業 「寺子屋」 (H24)
- 日本財団助成金事業 「寺子屋」 (H25・26)
- ドコモ助成金事業 (H29)

聴覚障害児を対象とした「集団作り」と「学習指導相談室」



初日に事前学習とホワイトボードづくり
2日目は、みんなで水族館に行きました!

地域に出向いて、小さなイベントも多数、開催してきました。

19

点と点を結ぶため ③

- 兵庫県難聴児親の会 (H25設立)
- 宝塚市難聴言語障害児親の会 (R4解散)
- 西宮市難聴児親の会 (全国組織から脱退)
- ぐるんぱの会 (豊岡・全国組織には属さず)

【親の会の役割】
・情報共有・交流の場
・必要な支援を行政・教育委員会と話し合う組織



・難聴児への情報補償
・軽中度難聴児への補聴器購入補助
・人工内耳体外器買い替え補助 などなど

20

③難聴者を取り巻く社会

～聴覚障害の経験談と、
相談担当者としての経験から～

21

聞こえる人の視点

22

講座受講者に毎回尋ねると。。

あなたは、ご自身の聴力レベルが言えますか？

右 ___dB (デシベル)

左 ___dB (デシベル)

では、
ご自身の視力は言えますか？
右 _____ 左 _____



視力は言えるのに、
聴力は言えない。。。なぜだろう。。

23

聴覚障害者のイメージは？

- 手話を使う人
- 発音が不明瞭な人
- 補聴器（人工内耳）を使っている人
（でも補聴器は見たことがない） など

「耳が遠い」＝「聞こえにくい」＝ 高齢者

という認識が強い。

24

大学になると、なぜ手話を学ぶ難聴者が増えるのか？

～ 難聴者からのお話 ～

- みんなが口を揃えて言うのは、「**会話が見える**」
→ 他で話をしている人たちの会話内容が見える、会話に入るかどうか自分で選択ができる。
知ってる話題を話されていたら気付ける。
- 会話が楽
→ 筆談では会話のペースに合わない、笑えない。

29

③難聴児を育む3つの力

～聴覚障害の経験談と、
相談担当者としての経験から～

30

(1)「個」の力 ①

【医師の連携と、保健師による「保護者の気づき」の啓発】

早期発見、早期療育で、本人の残存聴力を最大限活かす

【地域や家族、**仲間の支え**で、母子の心身の安定を支える】

難聴児者と共に歩む「**メンター**」の存在と、何があっても受け入れてくれる**地域・家族・仲間の存在が大切。**

31

(1)「個」の力 ②

【療育・教育・家庭の連携で、個々の能力を育む】

療育や学習で個の能力を育み、**自ら情報を得る力を養う**

→ GIGAスクール構想に感謝！多くの恩恵を受けられます。

ただ、社会は聴覚障害者にそのスキルを問います。。

相談する練習を積んでください。

(世の中、電話相談ばかり。情報センターや支援機関を活用してください)

32

(2)「輪」の力 ①

【コミュニケーション力を育む】

コミュニケーションのキャッチボールは、人間関係や社会性を学ぶ力となる。

「意見を交わす」「けんか」「相談」「同／多世代交流」

→聴覚障害者は転職が多い。転職理由の多くは人間関係。

「難聴学級」は同障同世代交流の場。門戸を広げませんか？

→親の心配は学力。でも、同障同世代交流は欲しい。。

取り出し授業は、画一的でなくてもいいのでは？

33

(2)「輪」の力 ②

【アイデンティティの確立・帰属集団の存在】

ろう学校・難聴学級、それぞれ母港になりうる場所

学校選択に影響する大きな課題・・・通学・情報

→ 通学支援制度の設立を。

→ 障害種別のポータルサイトの作成を

必要な情報は年齢に比して変わります。

支援が必要となる予備軍は沢山おられます。

保護者がいつでもアクセスできる情報サイトを。

34

(3)「環境」の力 ①

【教員のちょっとした視点で、環境を整える】

ポイントは、「音・水・暗闇」 別紙、ご参照ください
行事の下見は、難聴擬似担当者を決めて行ってください。
年間行事に、障害種別チェックシートを作成してください。

【ICTの力で環境を整える】

「GIGAスクール構想」に感謝！ ICTを存分に活かすために

→ ICTのエリア担当の配置を（教員資格よりも知識のある方）
機器の外部出力を解放してください。。（切実な願いです）

35

(3)「環境」の力 ②

【専門家の視点で環境を整える】

言語聴覚士の先生による指導に感謝！

個別指導もいいのですが、ぜひ、授業の様子を見ていただいて、環境調整や子どもたちとの関わり方の相談ができるといいですね。

【要約筆記/手話通訳者、当事者など、外部の力を借りる】

情報保障を取り入れるかも、育む環境が必要。

音声認識は、機器の下準備、話者の話し方、誤字修正が揃って初めて使える情報保障となる。

36

ご清聴ありがとうございました。



情報センターHPCに、
「子ども情報」ページを作っています。

ぜひ、ホームページ、ブログ、Youtubeを
ご覧ください。



37

神戸市就学・教育支援委員会
神戸市総合教育センター601号室
2022年9月29日

重度難聴児の長期継続支援 ー総合聴覚センターの取り組みー

神戸市立医療センター中央市民病院
耳鼻咽喉科参事・総合聴覚センター長
内藤 泰



難聴(聴覚障害)の程度分類と対応する機器

- **軽度難聴:** 25 dB 以上 40dB 未満

小さな声や騒音下での会話の聞き間違いや聞き取り困難を自覚する。会議などでの聞き取り改善目的では、補聴器の適応となることもある

- **中等度難聴:** 40 dB 以上 70dB 未満

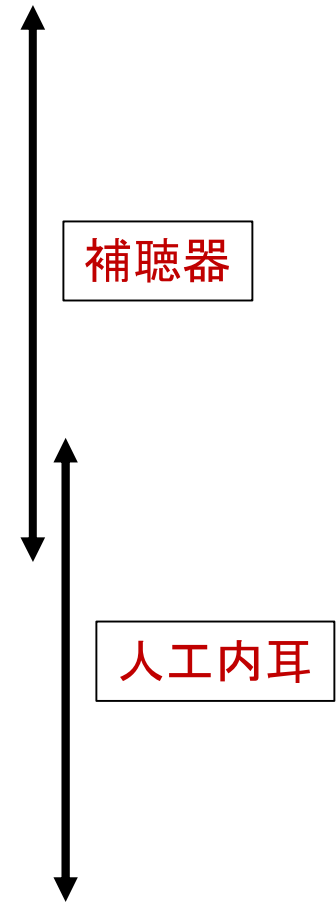
普通の大きさの声の会話の聞き間違いや聞き取り困難を自覚する。補聴器の良い適応となる

- **高度難聴:** 70 dB 以上 90dB 未満

非常に大きい声か補聴器を用いないと会話が聞こえない。しかし、聞こえても聞き取りには限界がある
人工内耳も検討対象

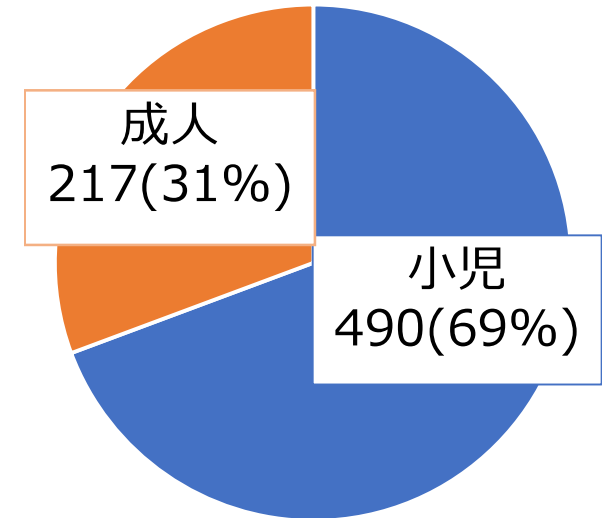
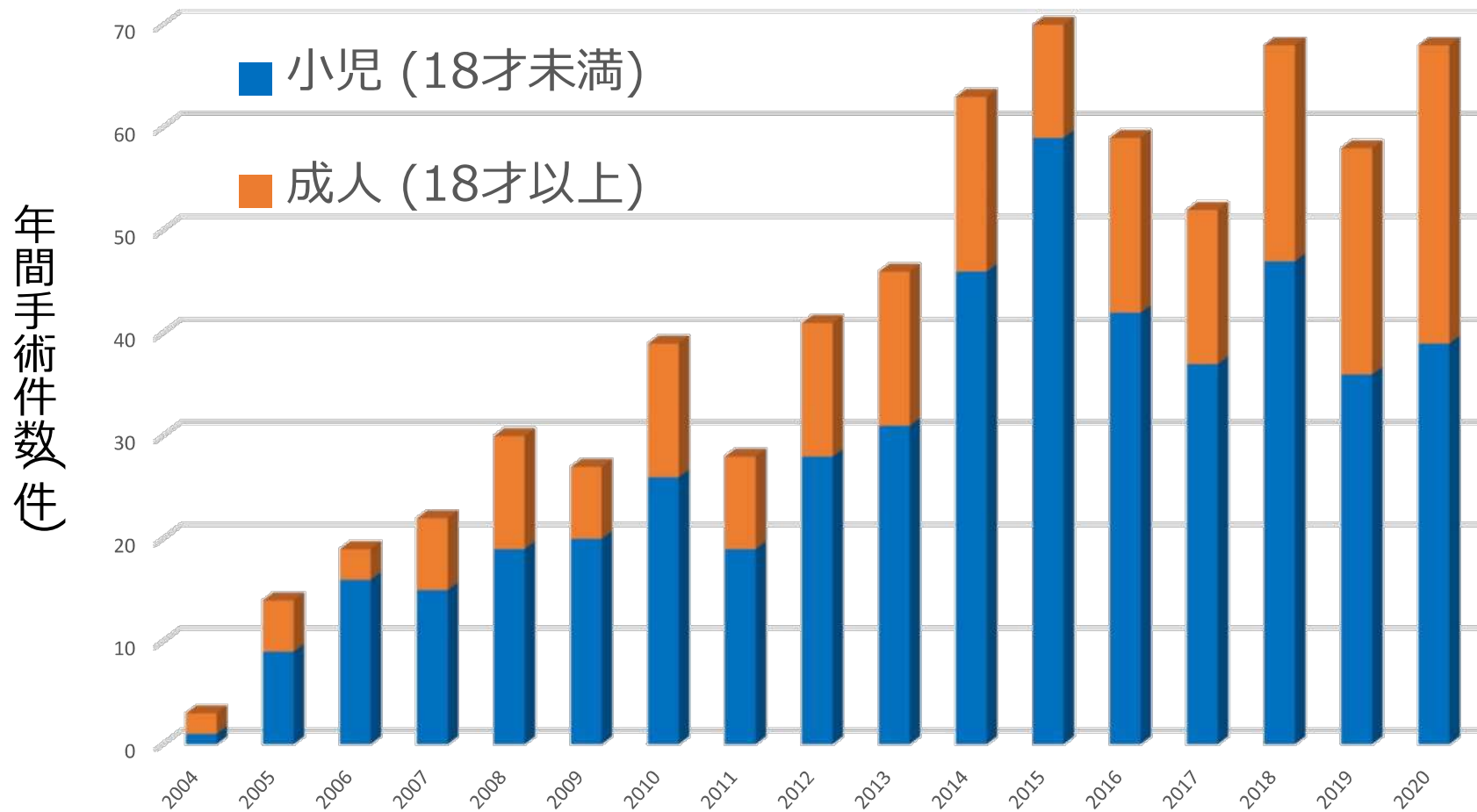
- **重度難聴:** 90 dB 以上

補聴器でも、聞き取れないことが多い。人工内耳の装用が考慮される



当科の人工内耳手術 (2004.11-2020.12)

人工内耳手術件数:累計707件



新生児聴覚スクリーニング検査の歴史と概要

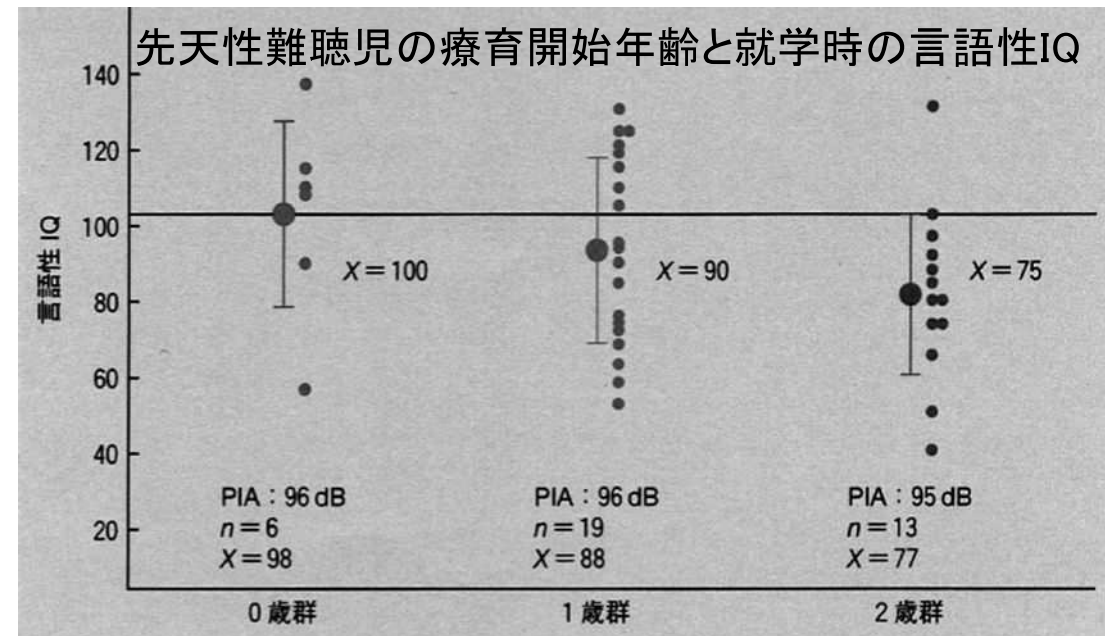
- 小児の難聴では早期発見と早期介入が良好な言語習得につながる
- 1990年から1才6ヵ月児健診、3歳児健診で言語発達チェックとささやき声検査
- 厚労省:2001年から新生児聴覚スクリーニングのモデル事業
- 2006年以降は各自治体に任せる
- 神戸市:令和元年10月1日以降出生の新生児に検査費用助成

自動ABR検査 5000円(上限)

OAE検査 3000円(上限)

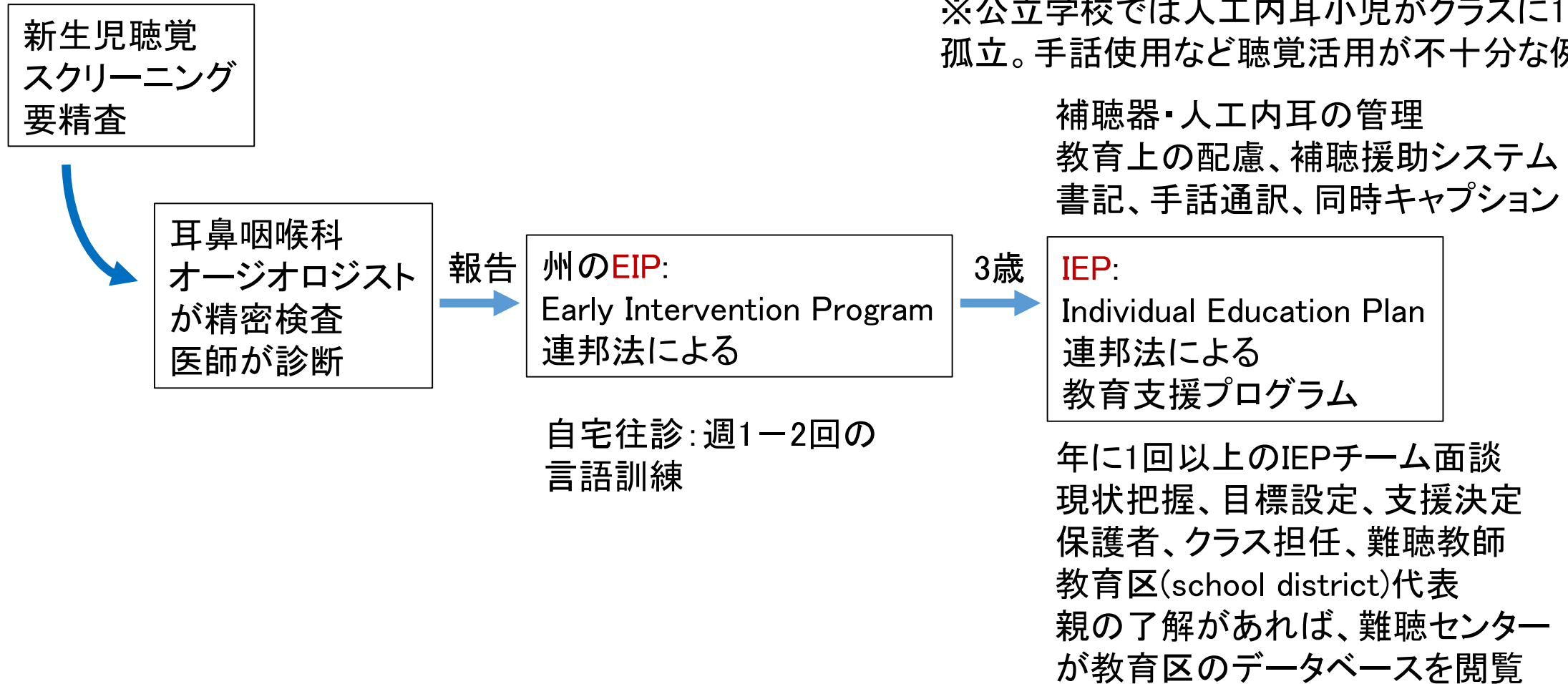
- 難聴対策議連: Japan Hearing Vision (2019)

加我、小児耳、2013
内山勉



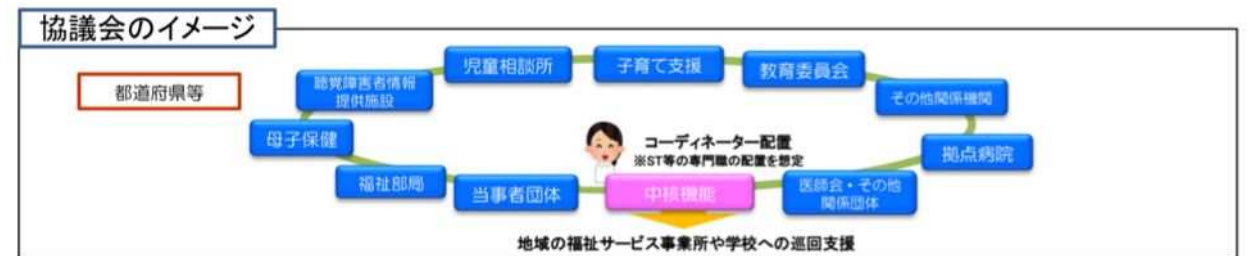
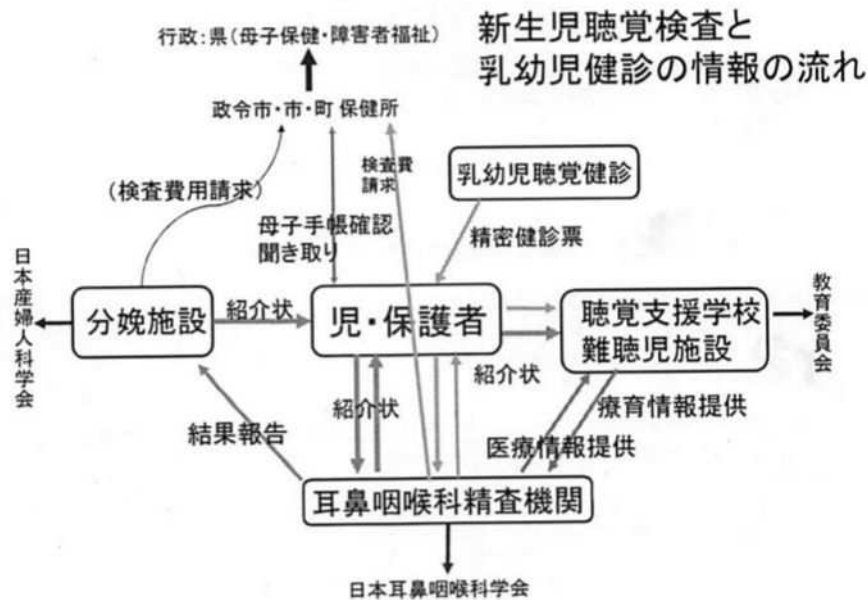
米国(ロサンゼルス)の難聴小児ロードマップ

※公立学校では人工内耳小児がクラスに1人程度で孤立。手話使用など聴覚活用が不十分な例もある



厚労省モデル事業による難聴児支援体制の強化

聴覚障害児支援中核機能モデル事業(厚労省)



総合聴覚センターの中核機能

関係する医療機関(産婦人科・耳鼻咽喉科・小児科)、教育、行政の連携ハブとして、新生児聴覚スクリーニング要精査判明の段階から情報入手して難聴児の早期診断・早期介入と保護者および関係機関の負担軽減

(第2回兵庫県難聴児への支援のあり方等検討会議資料より)

新生児聴覚スクリーニング検査助成券利用状況

1. 出生数

	R1年度	R2年度
出生数 (※)	10,492	9,730

※ その年度に神戸市に出生届を提出した人数

2. 受検児数および結果

	R1年度 (※)	R2年度
初回受検児数	4,302	8,725
パス	4,171	8,407
リファア	131	318
確認受検児数	107	251
パス	91	170
リファア	16	81

※ R1. 10制度開始

助成券を使わなかった例

- ・ 医療機関で出産費用に含めている。
- ・ 未熟児や他の病気があつて検査できない。

(第2回協議会資料:神戸市こども家庭局)

「両側難聴児の出生率が1/1000だから神戸市は毎年10名の難聴児を新たに支援する」という結果の数値だけではこの事業の本質は理解できない→その10名に絞り込む過程が重要であり、誰も正確な全体像を把握できていない

未受検あるいは不明:1005名

確認検査未受検:67名

最終的な要精査:81名 0.83%

→精査の結果はリアルタイムに把握されていない
(後年の日本耳鼻咽喉科学会の集計に依存)

兵庫県・神戸市のスクリーニング検査の課題と目標

- 初回検査受検率(神戸市):83.9% (8168/9730) (兵庫県専門家会議資料 2021/11/24 より)
- 確認検査受検率(神戸市):91.5% (214/234)

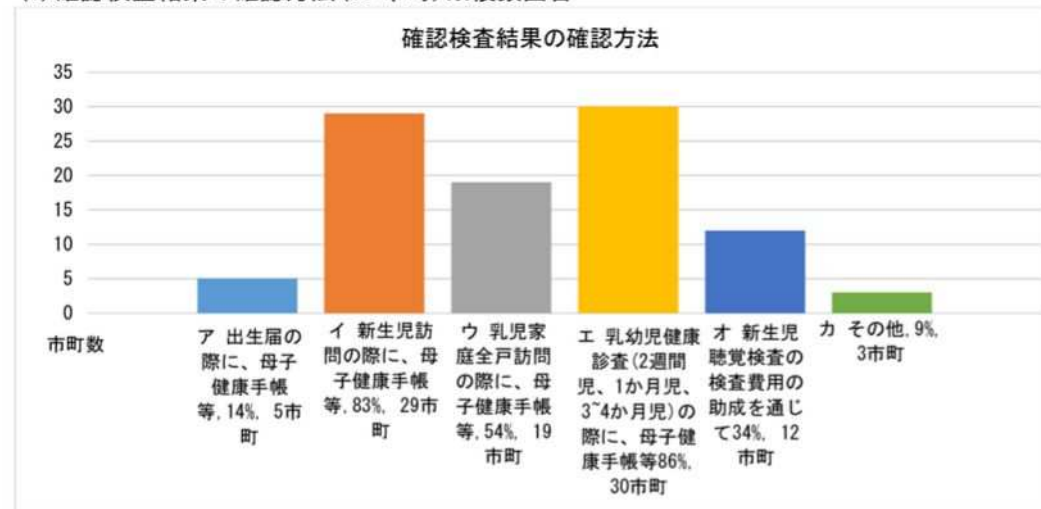
→前掲の神戸市の集計と数値が合っていない

- 検査結果の確認体制が不統一
- 精査結果
- 方針決定時期が遅い

→片難聴:両難聴:正常=1:1:2

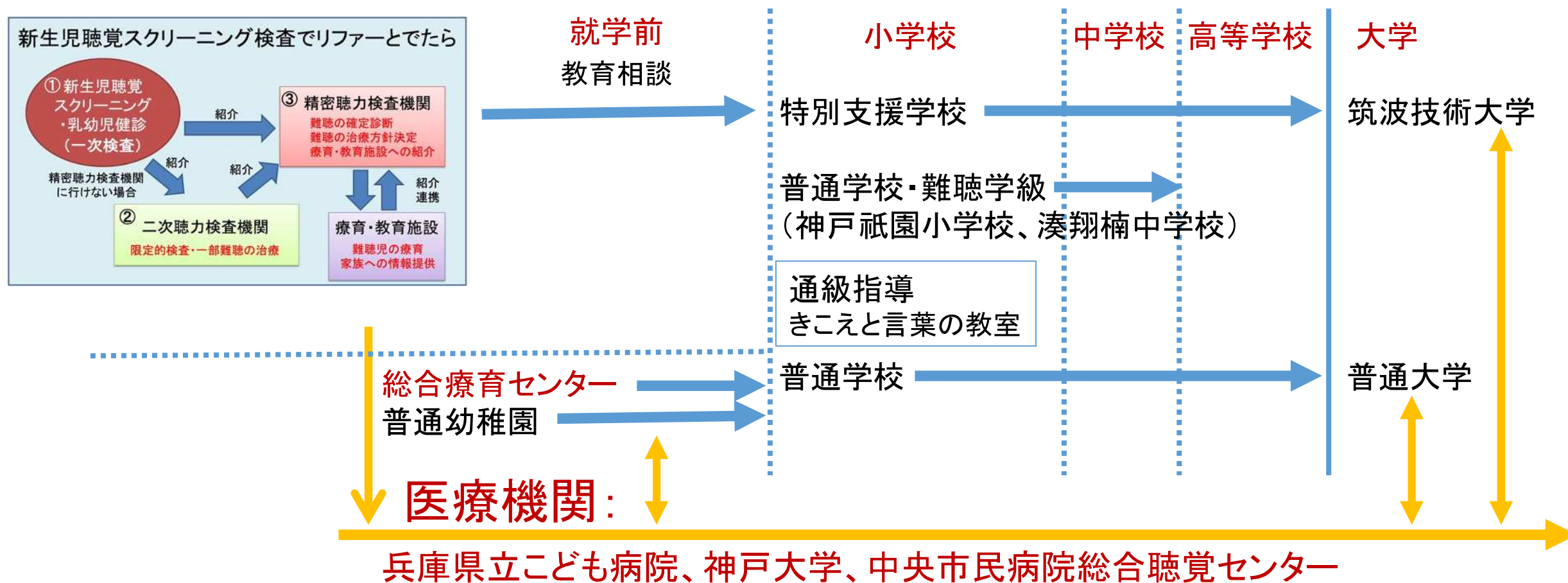
→**確定診断が6か月以降 35%**

(1) 確認検査結果の確認方法 (35 市町) ※複数回答



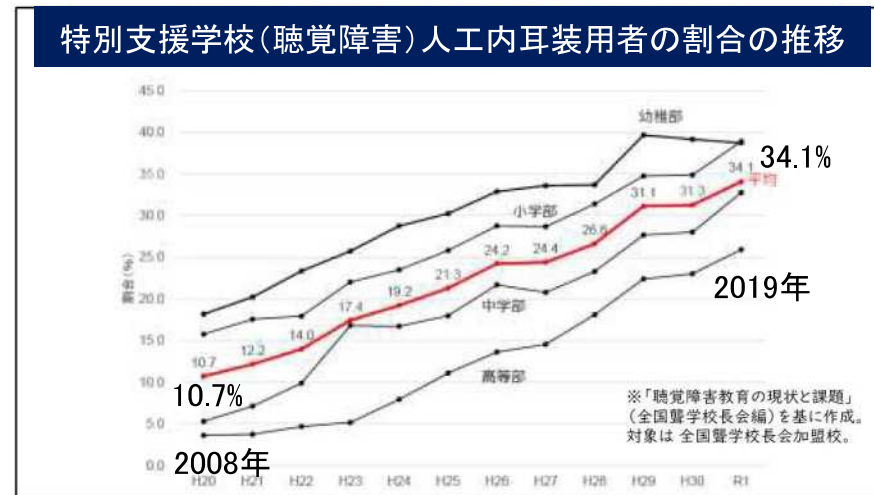
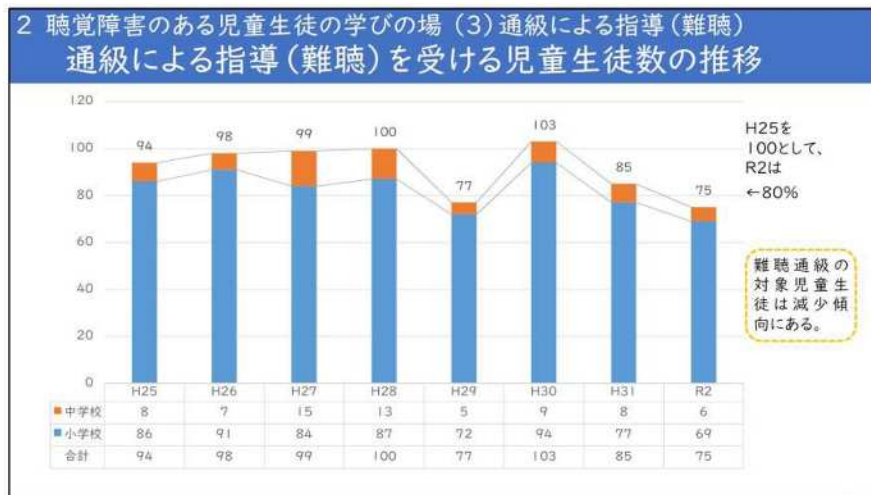
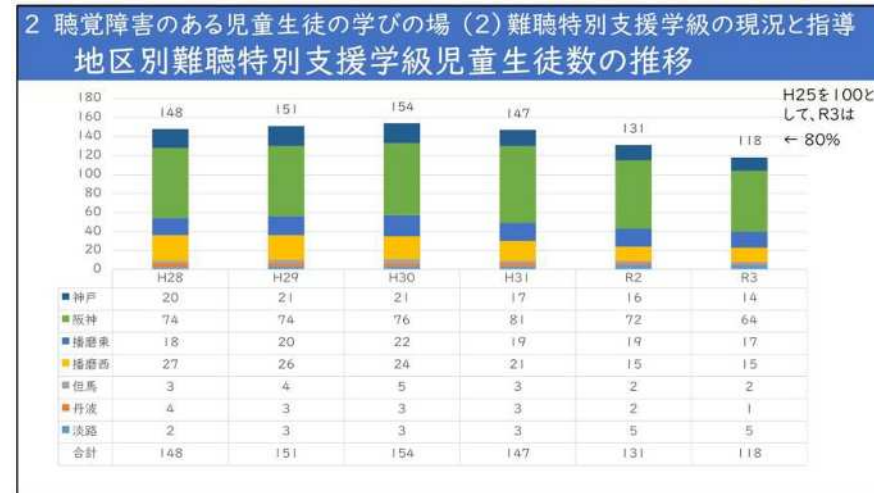
- 目標
 1. 新生児聴覚スクリーニング検査の100%実施:精査の統括と進捗管理
 2. 1-3-6ルール徹底:スクリーニング要精査後の保護者支援
 3. 中核機能モデル事業を活用した全体像の把握と円滑な連携

難聴小児：特別支援教育と普通教育が多様に併存 難聴児の全体像把握が困難になりつつある



..... : 多彩な進学経路→支援体制に切れ目

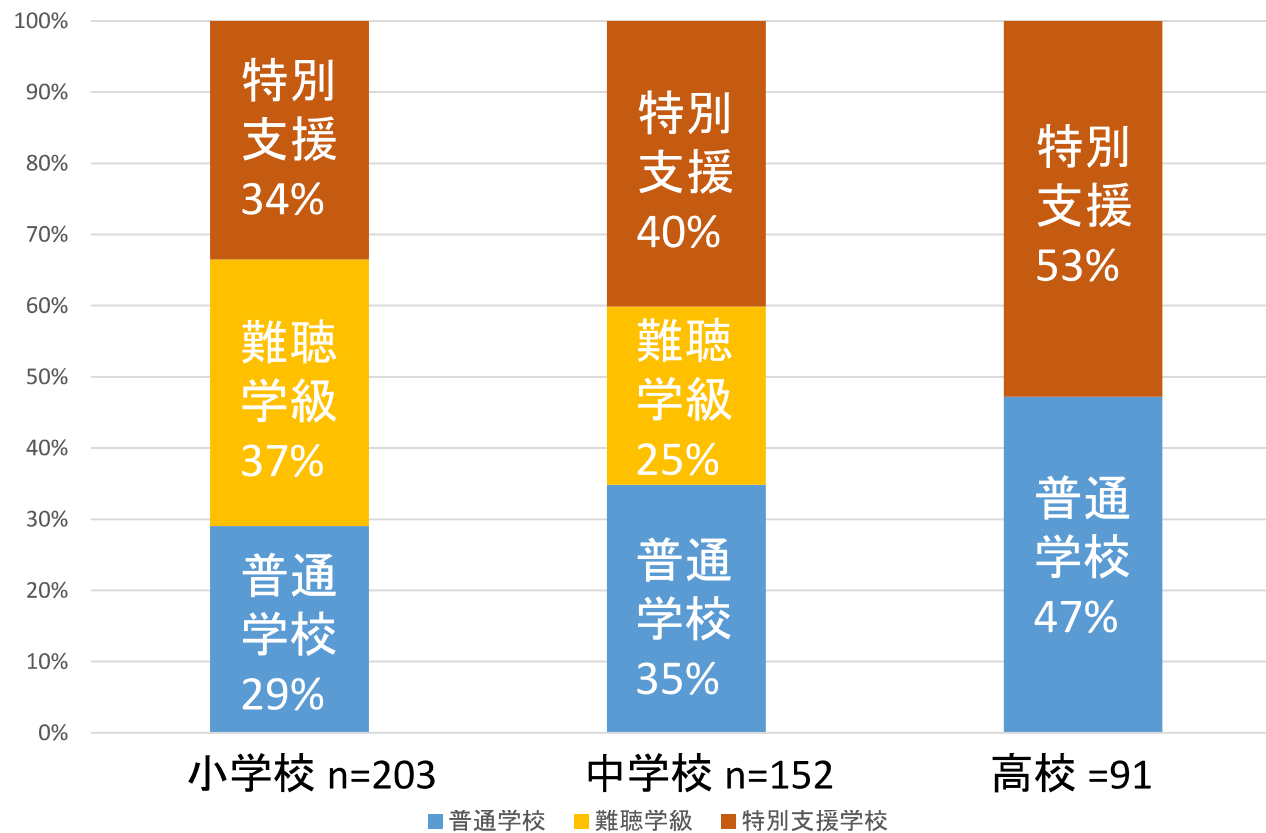
兵庫県・神戸市における聴覚障害児教育の現況



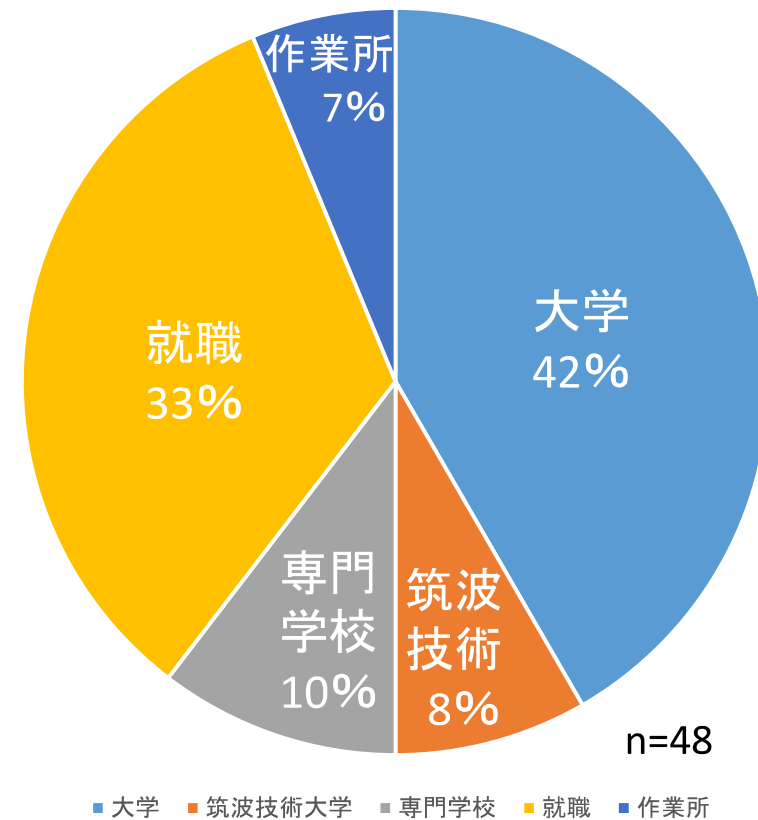
当科における重度難聴小児の教育進路の現況

(2022年現在)

人工内耳使用小児の進路



高校以後の進路



人工内耳装用児の言語・社会発達指数と就学進路

	手術月齢	人工内耳術前値(月齢)	就学時直近値(月齢)
• 普通学校(n=10)	37.5±16.7月	66.5±23.8 (29.9月)	99.3±18.2 (64.3月)
• 難聴学級(n=12)	33.4±12.3月	60.3±10.2 (30.1月)	86.8±20.3 (66.9月)
• 聴覚特別支援学校(n=8)	52.0±17.8月	44.8±13.6 (48.4月)	59.9±23.0 (78.8月)

(発達指数は新版K式発達検査による)

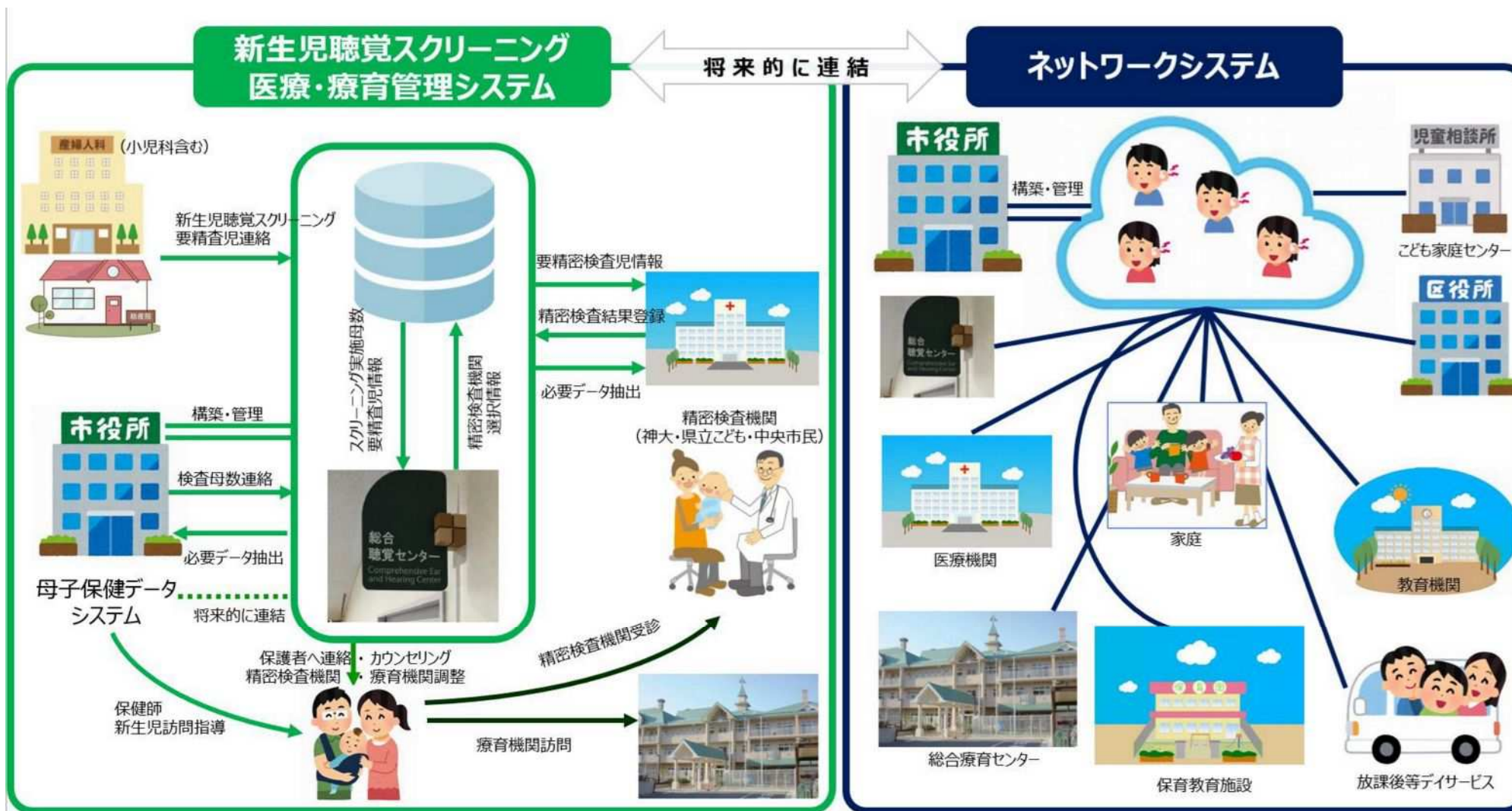
人工内耳装用児の就学時の発達指数と進路

普通学校			難聴学級			特別支援学校		
認知・適応	言語・社会		認知・適応	言語・社会		認知・適応	言語・社会	
125	128		120	112		110	93	学校見学 本人の選択
123	110		107	108		105	87	音声言語良好 学習障害
113	110	← いじめ・不登校 高校から 特別支援学校	106	104	← 発達障害あり 高校から 特別支援学校	92	63	
111	108		116	103		80	63	
110	103		104	95		85	55	
109	96		109	94		65	54	
108	102		107	90		70	43	
104	90		97	89		88	21	
103	86		99	69	←			
97	60	← 中学校から 特別支援学校	98	66	←			
			85	60	←			
			74	51	←			

難聴児家族が経験する困難：患者任せで良いのか

- 最近悩んでいるのが、学校の先生に難聴のことをどう説明するか、ということです。今年度から難聴学級の担任の先生が変わり、初めは昨年度の先生から引き継いでもらえてるだろうと呑気に構えていましたが、また最初からお伝えしていかななくてはいけない状況だと気づき、いま色々とお伝えしているところです。そんなに何度もお時間をいただけないし、私の説明も上手ではないので、難聴のことを理解してもらうのが難しいなと痛感しています。難聴学級の先生だけでなく、交流学級の先生にも知って頂きたい。誰に・何を・どこまで・どのように伝えるか、考えすぎて分からなくなってきてしまいました。また頑張ってお伝えしたことも、先生が変わるとまた一から説明しなければならない状況に、正直少し疲れてしまっています。(第31回神戸難聴患者サロンより、人工内耳使用難聴児のお母さん)
- 難聴がわかったときや、進学に悩んだ時や些細な事でも困ったときに相談できる場所が必要。相談した時に聞いた病院で解決せず、また別の場所へ行って同じ説明を最初からしなければいけない等、体力もメンタルも疲れてしまう。(第2回協議会：難聴児のお母さん、手話使用)
- 幼稚園や学校との打合せには両親で出向き、人工内耳についての情報提供をおこなった。これは、重要なポイントと感じている。学校側との交渉においては親の情報量、コミュニケーション能力、熱意、こまめに学校訪問できるかなど、複合的な要素が多分に影響すると思われる。(第2回協議会：人工内耳使用難聴児のお父さん)

難聴児のためのデジタルデータ連携システム 聴覚障害児支援モデル事業で作業部会を設置



総合聴覚センターが主催する 難聴者の友達の輪・情報交換・交流の場

「神戸難聴患者サロン」

→毎月1回開催

令和4年度の開催テーマ

開催回数	日程	テーマ	形式	担当
第30回	5月24日	講演：人工内耳小児の幼稚園・保育園・小学校へのインクルージョンについて －よりよい情報補償を得るために－	Web	諸頭言語聴覚士
第31回	6月28日	講演：人工内耳学童・生徒の受験について －中学生、高校生、大学入試について－	Web	山崎言語聴覚士
第32回	7月26日	発表しよう！「私の毎日、私の特技」	Web	玉谷言語聴覚士
第33回	8月16日	サロン：職場での工夫・配慮について語ろう	Web	藤井言語聴覚士
第34回	9月27日	講演：ロジャー補聴援助システムの活用方法	Web	ソノバジャパン
第35回	10月25日	サロン：成人高齢難聴者の集い	対面	内藤泰センター長
第36回	11月22日	講演：難聴の原因と人工内耳の適応	Web	山崎博司研究部長
第37回	1月24日	講演：人工内耳の仕組みと脳の働き	Web	内藤泰センター長
第38回	2月28日	講演：人工内耳小児のこことばの発達 －その基本的援助方法－	Web	諸頭言語聴覚士
第39回	3月28日	発表しよう！「私の夢～将来を語ろう～」	Web	玉谷言語聴覚士

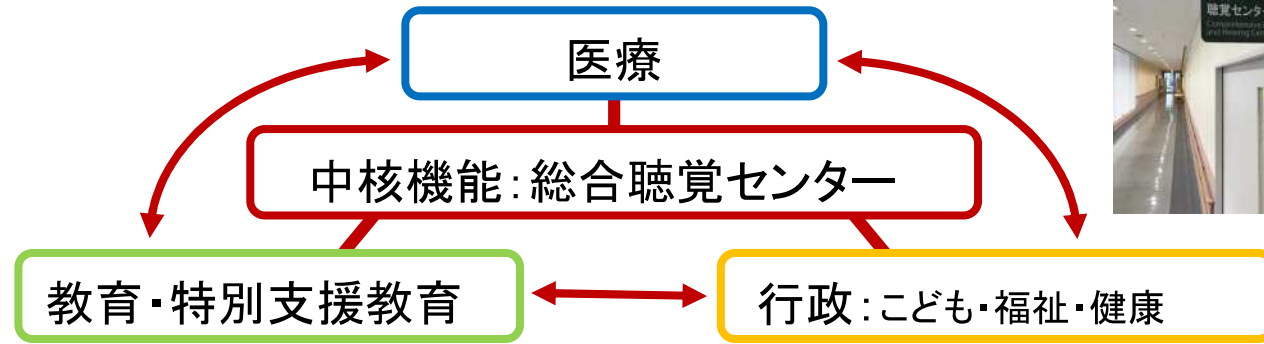


透明字幕ディスプレイ
See through Captions

総合聴覚センターの事業

聴覚障害児支援中核機能モデル事業(神戸市)

・聴覚障害児の新生児期から成人にいたるまで多様な状態に応じた切れ目のない支援体制を構築



難聴・聴覚障害の治療(本館: 総合聴覚外来・病棟)

人工内耳と重度難聴で本邦を代表するセンターの一つ

- ・人工内耳手術: 68件 鼓室形成術: 86件
- ・総合聴覚外来: 初診64件 再診722件 (4-12月)
- ・人工内耳リハビリテーション: 1726件
- ・人工内耳機器調整加算: 632件
- ・高度難聴指導管理料: 1295件
- ・乳幼児聴覚検査・発達検査: 1705件 (2021年データ)

難聴と聴覚の臨床研究

現在実施中の臨床研究: 11件

- ・特定臨床研究: 1件(山崎: IBRI)
「人工内耳装用者の包括的な聴覚関連脳機能検査法の開発に資する研究」
- ・文科省科研費(内藤)
「高齢高度難聴者の脳代謝に対する人工内耳装用の影響」

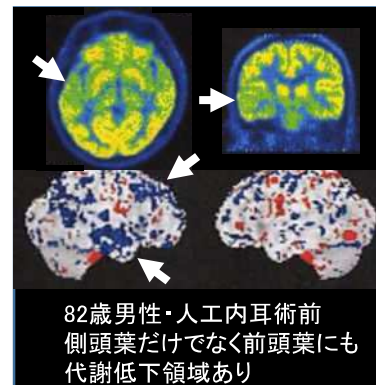


人工内耳手術
1年程度で
語音聴取著明改善

- ・一人で外出したくない
- ・人と話すのがつらい

- ・行動範囲拡大
- ・道で出会う人に挨拶
- ・明るい表情

第1例



研究目標

1. 側頭葉だけでなく脳全体への高度難聴の影響
2. 人工内耳の効果
3. 難聴と認知症との関係

第3回聴覚障害児支援モデル事業：研修会

日時：令和4年11月10日（木）13:00～14:00

方法：オンライン・ライブZoom meeting

講師：Prof. Akira Ishiyama

演題：

『米国における小児難聴のスクリーニング・早期介入とリハビリテーションの現状について』

（日本語で講演していただき、質疑応答時間あり）

聴覚障害児支援中核機能モデル事業 事務局（担当 谷之口）
神戸市立医療センター中央市民病院耳鼻咽喉科
総合聴覚センター

TEL：078-302-4516 FAX：078-302-7537

Eメール：c_choukaku@kcho.jp



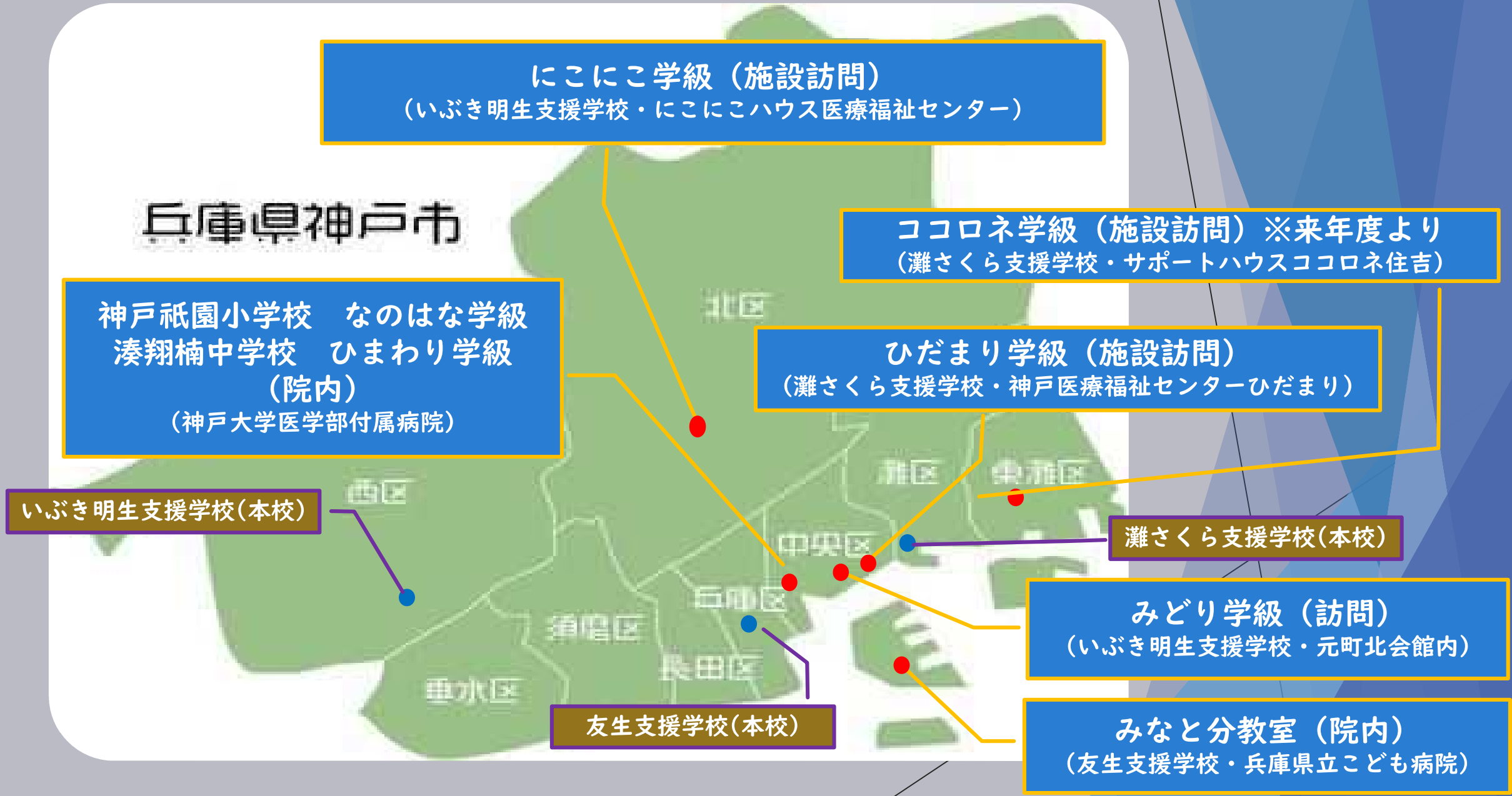
Dr. Ishiyama received his medical degree in 1990 from Northwestern University Medical School. He completed his internship and head and neck surgery residency training at UCLA. In 1997, Dr. Ishiyama was appointed to the faculty in the UCLA Division of Head and Neck. Dr. Ishiyama is the Director of the UCLA Cochlear Implant Program, which is recognized as one of the centers for excellence in California.

神戸市の病弱・肢体院内学級について



各病弱・肢体院内学級・訪問学級の所在地

兵庫県神戸市



各校の現状について(R4.10.1現在)肢体不自由訪問教育

①ひだまり教室（灘さくら支援学校）

在籍数

学年	人数
高2	1名



指導の状況

担当教員：1名

週2回（火・木）

自立活動中心に2コマ（合計80分）実施



各校の現状について（R4.10.1現在）肢体不自由訪問教育部 ②にここにこ学級（いぶき明生支援学校）

在籍数

学年	人数
中1	1名
中2	1名
高2	2名（過年度生）
高3	3名（過年度生）
合計	7名

指導の状況

担当教員：3名

1日1時間、週に4～5時間の学習時間を設定し、自立活動や合わせた指導、教科では図工や音楽などを中心に学習に取り組んでいる。



各校の現状について（R4.10.1現在）

②みなと分教室・わらび学級（友生支援学校・病弱部門）

在籍数

みなと分教室（院内）

学年	人数
小2	2名
小3	2名
小5	1名
合計	5名

学年	人数
中1	4名
中2	2名
中3	3名
合計	9名

わらび学級（訪問）

学年	人数
小2	1名
小6	1名
中2	1名
合計	3名

その他学習支援：小2名 中1名 計3名

指導の状況

担当教員：12名（うち教頭1名）

小学部：午前1～2コマ 午後1コマ

中学部：午前2コマ 午後1～2コマ

※治療の時間や体調に配慮し、時間数が変わることもある。



みなと分教室・わらび学級（友生支援学校）

・ICTを活用した取り組み

遠隔会議でオンライン動物園



テレロボで献血ルーム見学とインタビュー

各校の現状について (R4.10.1現在)

③みどり学級 (いぶき明生支援学校) (在宅肢体不自由訪問教育部)

在籍数

学年	人数
小3	1名
小4	1名
中1	1名 (ココロネ)
中2	1名
合計	4名

指導の状況

担当教員：2名

一人週2回

本人の体調に合わせて、1回につき2時間実施



各校の現状について（R4.10.1現在） 病弱院内学級

④神戸祇園小学校なのはな学級（神戸大学医学部附属病院）

在籍数

学年	人数
小1	2名
小2	1名
合計	3名



指導の状況

担当教員：1名

毎日、午前1時間、午後1時間程度
本人の体調に合わせて実施



各校の現状について（R4.10.1現在） 病弱院内学級

④ 湊翔楠中学校ひまわり学級（神戸大学医学部附属病院）

在籍数

学年	人数
中1	2名
中2	1名
合計	3名



指導の状況

担当教員：1名
毎日より1時間実施
体調に合わせて実施



課題の整理

- ① 神戸医療福祉センターひだまり（R4年度）
サポートハウスココロネ住吉（R5年度）
施設に最も近い肢体不自由部門のある特別支援学校に訪問学級を設置

《ねらい》

- ・本校から巡回訪問指導として対応できる。
- ・スクーリングの際、利便性がある。
- ・担当教員は本校での業務を通して専門性を高めることができ、より
できやすい環境となる。

課題

みどり学級（在宅肢体不自由訪問教育部）
主たる勤務地（元町北会館）JR元町駅北

いぶき明生支援学校(本校)



課題

- ① 本校と主たる勤務地が遠隔である。
・本校との連携が困難
- ② 一拠点から全市をカバーすることの利便性の問題
- ③ スクリーニングにおいて居住地により、移動時間に大きな差が出る。

方向性

居住地に近い肢体不自由部門のある支援学校が在宅肢体不自由訪問教育を担当する。

各病弱・肢体院内学級・訪問学級体制（案）



今後の課題（問題提議として）

- ▶ 本校在籍の児童生徒で体調面等の問題から登校日数が減少している場合、訪問教育部門への変更をどのように考え、整理していくべきか。
- ▶ 次年度以降、意見聴取を検討